

**青年招へい事業**  
**アフターケア調査チーム報告書**  
**平成12年(2000年)度**

JICA LIBRARY



J1165203(9)

**国際協力事業団**

|       |
|-------|
| 国内研   |
| JR    |
| 01-05 |

RY

**青年招へい事業  
アフターケア調査チーム報告書**

**平成12年(2000年)度**

**国際協力事業団**



1165203[9]

マレーシア



PAMAJA 会長、副会長と

ケダ政府事務所訪問



アイダさんファミリーとホームビジット

フェアウェルパーティーにて  
マレーシア国歌を斉唱

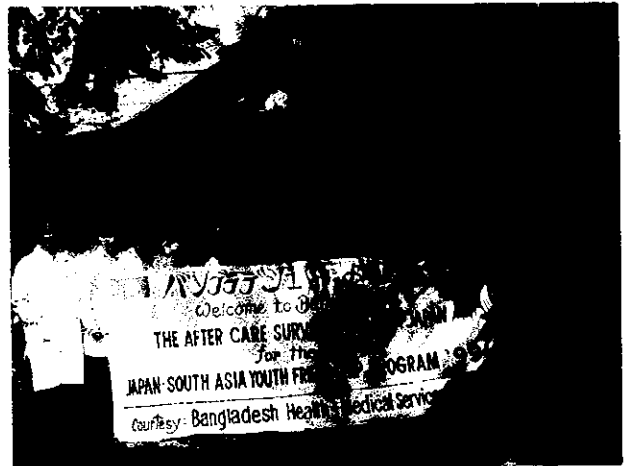


Bangladesh



JICA 同窓会

Tejgaon Thana Health Complex 訪問



青年の家庭に招かれての歓迎会

帰国青年主催交流会

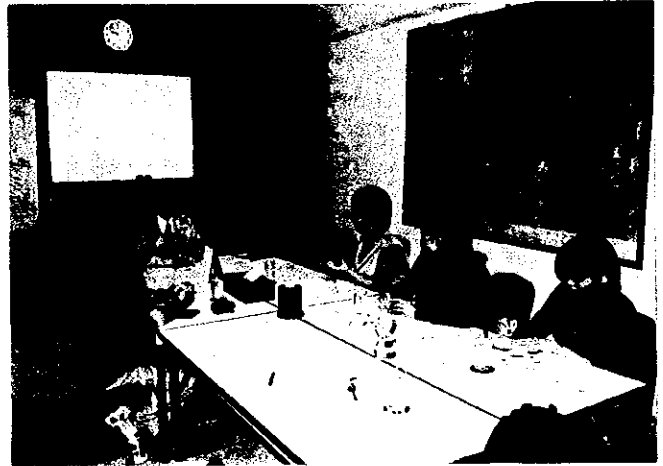


タイ



ラン農園にてサクチャイさんと

TRFにてヌイさんと



IMPECTにてインさんと

カセサート大学にてノックさんと



## 目 次

|                  |    |
|------------------|----|
| I. 概要報告 .....    | 1  |
| II. 国別報告 .....   | 5  |
| 1. マレーシア .....   | 7  |
| 2. バングラデシュ ..... | 29 |
| 3. タイ .....      | 57 |

### [国別報告構成]

#### I. 調査目的

1. 調査目的
2. 調査内容
3. 調査団員

#### II. 調査結果

1. 日程
2. 主要面談者
3. 調査結果概要
4. 現地調査・活動内容結果
  - (1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容
  - (2) 帰国青年活動状況
  - (3) 交流会
  - (4) ホームステイ
  - (5) その他
5. 所感及び提言
  - (1) 調査団所感
  - (2) 団員所感
  - (3) 提言

# I. 概要報告





## I. 概要報告

### 1. 目的

青年招へい事業のアフターケアの一環として、本邦での招へいプログラムの実施に協力した受入関係者が、各招へい対象者を訪問し、参加青年に対するフォローアップと国民レベルでの相互理解の発展と永続的な友情を築くことを目的とする。

### 2. 派遣対象者

分野別都内プログラム関係者、分野別地方プログラム関係者、共通プログラム関係者等  
「青年招へい事業」日本側関係者

### 3. 派遣国及びチーム編成

平成12年度は、マレーシア、バングラデシュ、タイに対し、合計3チーム(12名)を派遣した。各チームはリーダー1人とメンバーにより編成されている。

### 4. 派遣日程

| 派遣国     | 実施協力団体          | 派遣期間               |
|---------|-----------------|--------------------|
| マレーシア   | (財)石川県ユースホステル協会 | 平成12年10月12日～10月20日 |
| バングラデシュ | (財)国際看護交流協会     | 平成12年11月19日～11月27日 |
| タイ      | 日本青年団協議会        | 平成13年1月11日～1月17日   |



## II. 国別報告



# マレーシア

平成 12 年 10 月 12 日～ 20 日

財団法人 石川県ユースホステル協会



## I. 調査目的

### 1. 調査目的

- ・ マレーシアの現状を関係機関等から説明を受け実際に視察することにより、2020年政策への取り組みを理解し今後の招へい事業受入プログラム改善に役立たせる。
- ・ 観光開発と環境保護とのバランスについての取り組みを知り、日本との相互研修に役立たせる。
- ・ 青年招へい事業等の来日青年の総合的窓口であるマレーシア同窓会(PAMAJA)を訪問し、青年達の基本的な考えと意見を聞き事後事業に役立たせる。
- ・ 青年招へい事業に来日した青年達の職場訪問をし来日後の青年の考えと職場における活動状況を知り今後の理解を求める。
- ・ 来日青年とホストファミリーとが再会し相互交流を計ることにより、両国間のより深いフレンドシップを期す。

### 2. 調査内容

#### (1) JICA マレーシア事務所

- ・ JICAの現地での活動内容や、国情等、今後の調査についての聞き取りを行う。

#### (2) 在マレーシア日本大使館

- ・ マレーシアの国情について日本側からの見方を聞くとともに、2020年先進国入りに向けての政府の取り組みや実情について話を聞く。

#### (3) 政府観光局

- ・ 来日青年の職場を訪問し、来日成果の聞き取りを行う。また、マレーシアの観光、ケダ地域の観光開発等についての取り組みを聞く。

#### (4) ケダ地区

- ・ ホームステイ受け入れ青年のもとを訪れ再交流をはかるとともに、ケダ地区の観光開発、環境保護等の視察を行う。

#### (5) マレーシア帰国青年同窓会(PAMAJA)

- ・ 青年招へいに対する考えや成果、活動内容についての聞き取りを行う。



### 3. 調査団員

|      | 氏名    | 所属先             | 青年招へい事業との関わり           |
|------|-------|-----------------|------------------------|
| リーダー | 家山 勉  | (財)石川県ユースホステル協会 | 分野別地方プログラム<br>担当者      |
| メンバー | 岩田美穂子 | (財)石川県ユースホステル協会 | 分野別地方プログラム<br>ホストファミリー |
| メンバー | 前山 絹代 | (財)石川県ユースホステル協会 | 分野別地方プログラム<br>ホストファミリー |
| メンバー | 南 祐貴子 | (財)石川県ユースホステル協会 | 分野別地方プログラム<br>担当者      |

## II. 調査結果

### 1. 日程

10月12日(木)

11:50 関西国際空港発 (JL)

シンガポール空港乗り換え

19:20 クアラルンプール国際空港 (KLIA) 着

21:30 コンコルドホテル着・チェックイン

夕食・JICA 職員と打ち合わせ (於：コンコルドホテル)

10月13日(金)

09:10 ホテル発

09:15 JICA マレーシア事務所訪問

11:00 マレーシア人事院表敬訪問

12:30 JICA 職員と昼食 (於：パンパシフィックホテル)

14:40 マレーシア政府観光局訪問

16:30 市内視察

20:00 スバン空港発

20:50 アロースター空港着

21:15 コンチネンタルホテル着・チェックイン

同窓会青年と夕食会 (於：コンチネンタルホテル)

10月14日(土)

- 09:30 ホテル発
- 10:00 ケダ州政府事務所訪問
- 11:00 クアラペルリスへ移動  
昼食
- 13:45 クアラペルリス発(フェリー)
- 14:30 ランカウイ島着
- 14:40 ケダ地域開発公社ランカウイ事務所訪問
- 15:50 ホリデイヴィラホテルチェックイン  
島内視察  
同窓会青年と夕食会(於：シーフードレストラン)
- 23:00 ホテル着

10月15日(日)

- 12:00 ホテル発  
同窓会青年とランカウイ地域開発視察
- 14:00 昼食(於：タイ料理)  
ワニ園・ギャラリーアベルダナ・ガラス工房他
- 16:30 ランカウイ島発
- 17:45 クアラケダ着  
アロースター市内及び、市場視察
- 18:45 同窓会青年と夕食
- 20:35 アロースター国際空港発
- 21:35 スバン空港着
- 22:15 コンコルドホテル着・チェックイン

10月16日(月)

- 10:00 ホテル発
- 10:10 在マレーシア日本大使館表敬訪問
- 11:40 国立青少年センター訪問  
PAMAJA 会長及び、青少年センター部長他と昼食
- 15:00 政府観光局刊行物配送センター訪問
- 16:30 マレーシア帰国青年同窓会訪問(於：コベナ・副会長オフィス)
- 19:40 ホームビジット・懇親夕食会

22:00 ホテル着

10月17日(火)

09:00 ホテル発

09:30 人的資源省・労働局訪問

11:15 マレーシアユースホステル協会視察  
ユースホステル協会職員と昼食

15:00 クアラセランゴル地方視察

18:20 夕食

19:40 ホタル視察

21:50 ホテル着

10月18日(水)

11:00 ホテル発

'97来日青年とクアラルンプール市内視察  
昼食

16:00 JICA 事務所へ報告

20:30 PAMAJA 主催送別会(於:TITIWANGSA)

23:00 ホテル着

10月19日(木)

11:00 ホテル発

市内視察  
(セントラルマーケット)

14:00 ホテルチェックアウト

昼食

17:30 ホテル発(関西国際空港行き)

19:00 ホテル発(成田空港行き)

20:45 KLIA 発(JL722)

23:00 KLIA 発(JL724)

10月20日(金)

06:10 関西国際空港着(JL722)

06:45 成田空港着(JL724)

## 2. 主要面談者

### (1) JICA マレーシア事務所

|    |       |
|----|-------|
| 所長 | 岩波和俊  |
| 次長 | 寺西義英  |
| 所員 | 吉田ひとみ |

### (2) 在マレーシア日本大使館

|       |                  |
|-------|------------------|
| 一等書記官 | 加藤義治(広報文化センター所長) |
|-------|------------------|

### (3) 人事院・東方政策課

|                                |                              |
|--------------------------------|------------------------------|
| Principal Assistant Director   | Mr. Khairuddin Bin Mat Yunus |
| Assistant Director             | Ms. Haslina Bt. Abdul Hamid  |
| (Mara University Of Tecnology) | Mr. Moho Hassan Awang Boon   |

### (4) マレーシア政府観光局

|                           |                      |
|---------------------------|----------------------|
| Senior Tourist Officer    | Mr. Sharin Aminullah |
| (Distribution Unit ('97)) | Mr. Shahrim Tan      |

### (5) ケダ政府事務所・ケダ地域開発公社ランカウイ事務所

|                   |  |
|-------------------|--|
| Special Assistant | Mr. Ammar Mahmood (Y.B Dato SUK Kedah)               |
| 所員                | Mr. Mohd Roslim Bin Bakar<br>( '97 調査団前山ホームステイ受入れ青年) |
| 所員                | Mr. Jibin Hanafi ('87・PAMAJA ケダ地区代表)                 |
| 所員                | Mr. Ariffin Abu ('92)                                |
| 所員                | Mr. Abdul Kadir ('96)                                |

### (6) 国際青少年センター

|                   |                                      |
|-------------------|--------------------------------------|
| Director          | Mr. Haji Adenan Bin Haji Abdul Wahab |
| Executive Officer | Mr. Marzuki Bin Hashim               |

### (7) マレーシアユースホステル協会

|                    |   |
|--------------------|---|
| Exective Secretary | Mr. Hamirudin Hashim                              |
| Hostel Supervisor  | Mr. Nor Azman (Kuala Lumpur International Hostel) |

(8) 帰国青年同窓会 (PAMAJA)

会長

Mr. Abdul Rahman Bin Abdul Razak

副会長

Mr. Haji Ibrahim Hj Mat Din

(9) 人的資源省・労働局

Director

Ms. Cik Zukiah Hussein

Asst. Director

Mr. T. Shanmugam ('97)

Ms. Aminah Bte Musthapha ('97)

3. 調査結果概要

2000年度における(平成12年度)アフターケア調査においては、私どもが1997年に受け入れたマレーシア国中小企業グループの青年を中心とした招へい青年達と会議を持ち、「ブミプトラ政策」や「ルックイースト政策(東方政策)」また、1990年発表の「2020年構想」に、これら青年がどの様にかかわっていくのかを知ることができたことは、今後の青年招へい事業にひとつの方向を見いだせるのでないかと思った。マレーシアの国造りにおいてもメガ・プロジェクト方針を打ち出しクアラルンプール新国際空港(KLIA)の新設(現在4千メートル滑走路2本を4本にし世界一の空港を目指す)プトラジャヤや新行政都市(1998年度より総理府・大蔵省など政府機関が移転中)マルチメディア・スーパー・コリドー(MSC)(マルチメディア関連ビジネスを含む世界的規模のハイテク企業地域)等々世界の中のマレーシアとして着実にアクションをおこしている実状を知り得た。このような現状を目の当たりにして、青年達の国に対する情熱をしり、また、日本訪問が彼らの職場での前向きに取り組む「力」の一助となっていることを知り、大いに喜ばしく思った。

以上の実状を知るにつれ、日本における日本青年の考えと、マレーシア青年の考えとの相違を理解し、相互に役立つようにするためには、プログラムの策定にあたって、来日青年へのきめ細かい配慮が必要であることを痛感した。

またPAMAJAの方々に、全てにおいてお世話をいただき、懇談できたことは調査チーム皆の喜びであり、心よりの感謝を申し上げたい。石川県においてもJICA事業のサポート組織の必要を考え、帰国した。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

① JICA マレーシア事務所

前日空港でお会いした吉田職員を訪ね、彼女の案内で岩波所長にお会いし、氏の執務室でマレーシアにおけるJICAの活動状況等を聞いた。

初めに、「ブミプトラ政策」「東方政策」に続く「2020年構想」におけるマレーシアの現状について聞いた。経済は1990年度から持ち直し、「2020年構想」のこともあり、上向きの傾向に向かっており、国全体に落ち着きと活性が見られ出した。ただし、政治の面では1999年11月連邦下院解散にともなう第10回目総選挙が実施され、マハティール首相が率いる与党(国民戦線)が148議席を得て多数党ではあるものの、13の地方政権(州)のうち連邦与党が掌握していない2州(クランタン州)(トレンガヌ州)については、野党(汎マレーシアイスラム党(イスラム原理主義に近い)が掌握している。そのため、この2州においては、7人の青年海外協力隊らが活動に苦労しているとのことであった。(2000年10月1日現在、長期専門家48名・シニア協力隊員は19名・隊員48名、計115名が活動中)

また、海底油田から60万バレルの石油が出たため、一般価格においてはシンガポールより低価格となり、シンガポールから車にガソリンを入れに来る人が増えた。そのため、マレーシア政府は、10月6日から外国車両の給油を最高20リットル以下に制限すると発表し、違反したスタンド経営者には1万5千RMの罰金・禁固刑などが科せられることになった。しかし、現在充分に守られていないらしい、とのことであった。(石油価格(ガソリン)マレーシア—1.20RM/リットル(新価格)1.10RM/リットル(旧)・シンガポール—3.00RM/リットル)

国教はイスラム教で国民の53%が信徒であり所長室の窓の下には大きな回教寺院が見られた。正午近くには沢山の参詣人が訪れるとのことであったが、まだ時間が早いのか姿はなかった。

クアラランプールの街づくりに関しては、駐車場の問題も大きく、アパートや公共の建造物の建設にあたっては地下などに駐車場の設置が義務づけられているとのことであった。その他には、回教の国であり、戒律が厳しい中でもセクハラの問題が起きていると聞き、少しとまどいを感じた。

## ② 在マレーシア日本大使館

大使館で応対をしていただいた加藤一等書記官は昨年マレーシアに着任された方で北陸の人(福井県武生)ということで話もスムーズに進行した。

### ・経済

ゴム・錫の国際価格暴落や東南アジアの経済困難などの影響で経済は停滞していたが、積極的外資導入などにより1997・1998年と連続して経済成長率は約8%を保っている。1999年には引き続き安定した状態を保てそうとのことで、中止していたモノレール、地下鉄、道路跨橋の工事なども再開されている。また、日本はマレーシアにおいては輸出相手国としては3位(1.米国 2.シンガポール 3.日本)であ

り、石油機械など79.58億ドルに及ぶ大きな貿易相手国である。在留邦人は11,545人、日系企業も1419社(いずれも10月10日現在)あり、マレーシア経済に大きな比重を占めている。今後とも日本企業、日本人のマレーシア来訪数が増えていくことが予想されている。

・政治

優れた指導者であるマハティール首相のもと安定した政権を保っているが、前回の選挙後地方政権13州のうち2州が野党政権になったことにより、多少の影響は考えられる。しかし現在のところ、今のところ国民にも動揺が見られない。特に、「指導者は常にスローガンを声高く唱えなければいけないが、諸外国に対しても自由に発言できるマハティール首相がうらやましく思われる。」との言葉に深い共感を覚えた。

③ 人事院東方政策課

マレーシアでの青年招への窓口である人事院では派遣までの流れについて伺った。JICAで分野及び募集人数が決定された時点で、24省へ募集の広報が流れる。各省で選考後、人事院へ送られてくる名簿に掲載されているメンバーは約300名である。その後筆記試験があり、合格した青年がグループ面接により、積極性や協調性をもとに選考される。最終合格者150名のリストがJICAへ提出されチェックをうける。このとき不適格者がいればメンバーチェンジもあり得るとのことであった。決定メンバーはオリエンテーションを受け、日本へと研修に来ることになる。

人事院の話ではアプリケーションフォームの締め切りは3ヶ月前とのことだが、日本へアプリケーションフォームが届くのは約1ヶ月前、もう少し早く届けばよりメンバーに適したプログラムを組むことができると提案したが、仕事の都合がつかずにメンバーチェンジすることもあり、これが精一杯との事であった。来日時期についても話が出たが、やはり回教国であり、ラマダンの時期の来日は無理なので招へい時期についてはJICA側に配慮をお願いしたいとのことであった。

④ マレーシア政府観光局

来日青年であるシャリムさんをはじめ数人の観光局員に会う。スライドを通して観光局の基本方針などの説明をお聞きした。マレーシアでは今、外貨獲得のための短期戦略として、観光を産業の重要な位置におこうとしている。そのため、a. 外国からの観光客を増やす、b. 観光客の滞在期間を長くする、c. 国内観光を発展させる、ことに重点を置いている。

具体的にはツーリストの興味を分析しそれぞれに合わせた旅の計画を進めていく。ショッピング、フード(KL・ランカウイ)、ビーチリゾート、アドベンチャー(ランカウイ・ペナン)、ヒストリー、カルチャー(マラッカ)という風に、重点をしばった観光開発に力を入れていきたいと言うことであった。多くの民族が住み、豊かな自然に恵まれたマレイシアでこそ可能だと思えた。「日本に対しては安心して近くて楽しいところである。」と積極的にアピールしていきたいとのことであった。

#### ⑤ ケダ政府事務所

ケダ政府事務所にてビデオを見て、観光開発事業について話を聞いた。

ビデオでは美しいビーチ、緑広がる田園、動物たち、ケダ州の自然や方針などが紹介された。アマルさんの話では、「外国からの観光客をもっと呼びたい、ランカウイ島をはじめとした主要な観光地をインターナショナル化したい、そして今最も力を入れている事業は「シルバープラン」である」、とのことだった。このプランは世界のリタイヤした人達にペナンやランカウイに滞在してもらう計画のことで、ヨーロッパ風・韓国風・日本風などいろいろなスタイルの家・居住地区をつくり、約300万円の預託金で一軒家(3ベッドルーム+2バスルーム+DK)を与えてくれるという。マレイシアは自然が豊かで気候も良く、食べ物にも不自由しない、台風・地震は全くないし、ゴルフ場も安価であるとの説明がされた。言葉や医療の問題にも触れたが、公立の大きな病院では初診料70RMを支払えば他は無料であるとのことであるが、多少の疑問が残る。

#### ⑥ 国際青少年センター

アデナン部長とオフィサーのマズキさんから説明を受けた後センター内を視察し、レストランで昼食をいただいた。

国際青少年センターは1983年着工、1985年に完成した施設で、オープニングにはマハティール首相も出席された。ここは日本の書道家原田観峰氏の寄附(当時の金額で10億円)により建てられた。このことにより、原田氏は国王より爵位に相当する「ダトゥ」という称号を与えられ、ダトゥ原田と呼ばれセンターの運営に関与していた。

このセンターは青少年活動を中心とする国際会議をはじめ、国内外の会議等にも用いられ、様々な行事・活動等を提供する場所である。また、結婚式も行うことができ、宿泊施設も整っている。

宿泊施設は1人部屋から4人部屋まで50室あり、ドミトリー9室で250名収容できる。全室エアコンとシャワーがついている。ホールは700席あり、同時通訳システムもある。イスを片づければバトミントンコート2面分とれる。50～60席のミーティ



ングルルームが4室、30席のセミナールームが3室ある。このほか図書館、展示室、体育館、レストラン、青年協議会等の事務局が入っている。

また、この施設は一人からでも宿泊に利用できる。年齢制限はなく、予約なしでも泊まることができる。日本からはマレーシアの学校の姉妹校が利用している。福岡のユースセンターとは毎年情報交換を行い、福岡からマレーシアへマレーシアから福岡へと青年達の交流が行われている。近い将来友好関係を結び、石川県ユースホステル協会とも交流を持ちたいと話を結んだ。

#### ⑦ マレーシアユースホステル協会(MYHA)

MYHAは1955年に設立され、青少年スポーツ省から少額の補助金が出ていたが、現在はMYHAの直接運営によるクアラルンプール、ポートビクソン、マラッカの3YHの運営収入と会員の拠出金によって運営されており、財政的に苦しいとのことであった。この3YHの他にコタキナバル、青少年センター(クアラルンプール)の私営の2YHがあるとのことであった。

MYHAには現在5,000人の会員が登録されているが、会員は国外のYHに目を向けているのもっと国内を利用して欲しいとのことであった。

|    |        |                      |
|----|--------|----------------------|
| 会費 | 生涯(終身) | 200RM - 2,000人       |
|    | シニア    | 30RM(入会金5RM、年会費25RM) |
|    | ジュニア   | 15RM                 |

KLYHの利用者は年間10,000~15,000泊である。今後としては、一般地図にYHの所在地を入れること、インターネットと航空会社にPRをする、トラベルフェア(毎年1~3月ごろ開催)に参加していくなど、PRに力を入れていく方針だそうだ。また、YH独自の国内ツアーを企画して、マレーシアを訪問する海外の青年(特に日本人)に利用して欲しいとのことで、そのための日本語パンフレットも作成されていた。

例：カントリーツアー ゴム園でのゴム樹液採取

バドゥケイブ4億年前の洞窟等

所要(3H) ・費用(大-35RM 小-20RM)

テンブラパークー 1億3千年前からなる古い森林、ジャングル体験  
7層の滝と水遊び等

所要(3.5H) ・費用(大-45RM 小-30RM)

※いずれも送迎・記念撮影付

この他5つのプログラムを作って、積極的に勧誘をしている様子であった。

## (2) 帰国青年活動状況

### ① マレーシア帰国青年同窓会 (PAMAJA)

PAMAJAのラーマン会長とHaji イブラヒム副会長よりPAMAJAの活動内容について話をうかがった。

PAMAJAは1987年にJICAの招へい事業で来日した青年の代表者により設立された来日青年の同窓会で、以下の3種類のメンバーで構成され、計1,950名が現在所属している。

・正式メンバー フレンドシッププログラムによる来日経験者。

会費 10RM / 年

・協力メンバー フレンドシッププログラム以外の来日経験者(留学等含む)

会費 10RM / 年

・ライフメンバー PAMAJAの趣旨に賛同し、100RMの賛助会費を払ったメンバー

主な活動として社会活動、経済活動、フレンドシッププログラムのためのトレーニングやオリエンテーション、ホームステイの受け入れ、ジュニアグループのサマーキャンプなどがあるが、特にPAMAJAのジュニアグループである「WAKASA CLUB」については、現在メンバーを2年に一度日本へ派遣したり、日本の子供達の受け入れに協力したり、と今後の活動が期待されている。ラーマン会長は今のメンバーが21才以上になったら、協会を設立したいと私たちに熱く語られた。1995年より始まったこのジュニアフレンドシッププログラムは、来年(2001年)で4回目を迎えるが、経費の都合上2年に一度実施しているということである。

また、フレンドシッププログラムの事前オリエンテーションはJICAの経費援助を受けてPAMAJAが行っている。1997年度までは一週間の合宿によるオリエンテーションでチームビルディングや動機付けを行っていたため、グループ間の結束も強く、PAMAJAの活動の目的を理解し、メンバーとして皆活発に活動しているが、それ以後は経費削減のため十分なオリエンテーションができず、動機付けやチーム間の結束が弱くなり、PAMAJAメンバーとして活動する人が少ない現状であるという。ラーマン会長はこの問題を解決するため、今後は研修後にオリエンテーションをし、理解を深めていきたいと話していた。ラーマン会長の説明により、PAMAJAの活発な事後活動の理由と、日本への期待や青年招へい事業によるマレーシアの発展に対する強い思いを感じることが出来た。

### ② ツーリズムマレーシア配送センター

来日青年が出張のため人的資源省訪問の予定を変更して、シャリムさんの職場を訪問することになった。

シャリムさんの職場は観光促進用の政府刊行物(パンフレットやポスター)の配送センターで、世界各国20の支部や、国内のツーリズムマレイシアのオフィス、ホテル等に刊行物を配送している。シャリムさんは以前は本部にいたが、帰国後この部署に異動したそうである。日本での研修で印象に残っていることを聞いたところ、日本人は勤勉であり、非常に外国人に対してオープンであること、などが挙げられた。「観光業に従事しながらあまり人付き合いがよくなかった自分にとって、日本での研修は大きな影響があり、結果昇進してこの部署に来て今は上級部長のサポート役として働いている。部下へも始業時間こそうるさくは言わないが、自分の仕事の分担をきちんとこなすよう指導している。」との話であった。

### ③ 人的資源省・労働局

1997年中小企業グループのシャンムガムさんとアミナさんの職場は、日本で言う労働省のような役割をしている所である。シャンムガムさんは労働法の作成を担当し、アミナさんは労働法がきちんと執行されているかを監査する仕事にあたっている。その他の活動内容としては、労働環境の改善、作業環境の改善、身体障害者・麻薬常習の更正者への職場紹介、セクシャルハラスメント対策や、人種比率に合わせた就業指導などがある。マレイシアの労働環境はまだ未発達で、日本に多くを学んでいきたいという話で、日本での経験を大事にしているそうだ。マレイシアでは最低賃金法というものがまだなく、雇用者と労働者の間の取り決めにより給与の支払いがされているので、給与の高い職場に労働者が流れたり、給与が支払われないといったこともよくあるそうで、それに伴うトラブルも見られる。そのため省の中には簡易の労働裁判所があり、法の施行とともにそれがきちんと機能するような働きをも持つ。また、労働組合の力も強く、30%の労働者が組合に入っているとのことであった。現在、労働組合と政府が協力して、労働法の改善、再検討が行われている。失業率は3%、外国人労働者に多くを頼っているという。働く条件は厳しくても働く場は豊富だということであろう。研修の成果について聞いたところ、マレイシアの田舎の方ではゴトンロヨンという相互扶助の組織があるが、職場ではそのような助け合いの関係は見られないので、日本における上司と部下のコミュニケーションの良さがとても印象的であったとのことであった。帰国後はこの職場でも日本での経験を実践し、上司と部下の間に良いコミュニケーションができ、スムーズに仕事が進んでいるという話であった。

### (3) 交流会

#### ① ケダ地区同窓会青年との懇親夕食会

調査団前山宅にホームステイしたロスリムさんとケダ州の同窓会代表のジビンさんを囲んでの夕食会であった。夜遅くアロースターへついた私達を空港まで迎えに来てくれた彼らと夕食を取りながら、日本での研修などを中心とした話で盛り上がった。中でも、ジビンさんが息子さんを来年日本にジュニアフレンドシップで派遣する、と熱く語る姿が印象的であった。来日時に配布された「にほんご21」を片手に記憶を思い起こしながら日本語を話すロスリムさんと、私たちの片言の英語、言葉はお互いにぎこちないけれど心通う夜であった。

#### ② ホームビジット

1997年に金沢へ訪れた中小企業グループのメンバーの一人であるアイダさんのお宅を訪問した。クアラルンプール郊外にある、20畳近くの吹き抜けのリビングがある大きくきれいなお宅であった。近所に住むアイダさんの祖母や、同グループのシャリムさんも奥様と同席され、一緒に夕食をいただいた。短い時間ではあったが、日本に来たときの写真を見たり、折り紙をしながら歓談し暖かい家族愛に触れる良い機会となった。

マレーシアの一般家庭に訪問する機会はこの時だけであったが、印象に残っているのは、家の門にはしっかりと鍵がかけられ人が出入りする時のみ開閉されていたことであった。のんびりとした所のように見えても、やはり治安はそれほど良くないのだなという印象を受けた。マレーシアの住宅も日本と同じように靴を脱いであがるのだが、日本の住宅の玄関にあたる場所がなく、ポーチの前で靴を脱ぐとすぐリビングといった風で、同じ靴を脱いで家に上がる文化がある国でも、暖かいマレーシアでは違うものだなと感じた。

#### ③ PAMAJA 主催さよならパーティー

湖畔に浮かぶように立てられた市内のシーフードレストランで最後の夕食会が催された。ラーマン会長をはじめ1997年中小企業グループ青年や、同窓会青年8人が集まってくれ、今回の調査の労をねぎらってくれた。1997年度の来日青年は2名だけだったが、「日本が大好きで日本語を話したい。」と言う青年達がいて盛り上がった。日本へ行った事を誇らしげに語る姿や、「日本語をもっと勉強したい、子供達を日本へ送りたい。」との話から彼らの日本への思いを強く感じた。ラーマン会長ともメールアドレスを交換し、今後の交流を約束した。

## 5. 所感および提言

### (1) 調査団所感

今回のアフターケア調査には、企画日程について各方面にわたって調整をいただいたJICAマレーシア事務所及びPAMAJAの皆さん、JICA北陸支部など関係機関の方々に厚くお礼申し上げたい。

9日間という短い間といえは短い、一つの地方への一週間にも及ぶ滞在や行政機関等の訪問は今まで経験したことがなく、各団員はそれぞれに貴重な体験を得た。

当初期待し、予定をしていた来日青年25名全員には会うことができず残念だったが、これも現在マレーシアの経済が上向きのため、彼らの業務が忙しく、私共の限られた時間では調整がつかなかったのであり、仕方のないことである。その反面、考えてみると、それだけ青年達は、帰国後組織内において重要な立場になり、将来を嘱望されている結果であり、それは本事業の成果でもあるので喜ばしいことと考えられる。

また、来日の青年の数人には業務の間をぬって早朝から夜中まで誠心誠意お世話いただき頭の下がる思いであった。心から感謝を申し上げたい。

### (2) 団員所感

#### ① 家山 勉「マレーシアを訪れて」

9日間のマレーシア滞在中に見聞したこと、感じたことを思いつくまま書いてみたい。

##### ・生活の違い

まず、朝6時突然の窓外の大声に驚かされたが、それがお祈りの呼びかけの声だと気がつき、今私はマレーシアのクアラルンプールにいるのだと実感した。食べ物では訪問した先々で供されるコーヒー、紅茶全てに既に砂糖が入っておりその甘さは大変なものであった。また、お茶請けと考えられる小皿にサンドウィッチ(必ず出た)とクッキーかフルーツ、またはいろいろな様な菓子が出され、かぶせてあるラップを取り「どうぞどうぞ。」と勧められるため、常に胃は満腹状態で困った。一般的な食べ物はカレー風味の香辛料が多く使われているようであった。夕食の時間は遅い時間(午後9時~10時頃)らしく、10時すぎなのにパジャマ姿の子どもを連れて屋外レストランに来るなど夜遅くまで飲食店は盛況であった。

##### ・クアラルンプール

遠くからでも見え、夜空に輝くようにライトコントロールされたツインタワーは、KLタワーとともにクアラルンプールの街の象徴であり、私は「ジュエルタワー」と名付けた。それだけライティングが素晴らしく輝いて見えた。そして街に入ると街全体が大きなロータリーの如き様子であった。これは一方通行が多く、例えば真ん中にグ

リーン地帯があり、片側2車線歩道付の広い道路であるにも関わらず、4車線とも一方通行で、車で反対の事務所に行く時はぐるっと一回りしなければならなかった。これならば歩いた方が早いと考えられたが、横断歩道は少なく、命がけで車間を通り過ぎなければならぬ状態で、体の悪い人や、年配者はどうするのかと考えさせられた。

夜はタクシーなどの車は平気で歩道に乗り上げて駐車されていて、歩くのに苦勞したし、私たちのチャーターした車はよく両車線をまたいで走るなど、車の多いのは日本と同じだがマナーは良くないようであった。

交通緩和のためかこの10月1日からクアラルンプール定期市内観光バスが午前7時～深夜まで30分毎に6台運行されることになった。料金は1RMで、将来は1.5RMになるということであった。空港や街の中、大型ショッピングモール、市中央のクリケット場などにはセパン国際サーキット場で10月20～22日に開催されるマレイシアGP(F1レース)の垂れ幕や、車両展示などがあり、ムードが盛り上がっている様子が見てとれた。

#### ・その他

クアラルンプール国際空港(KLIA)に近づくにつれ、あちらこちらのパーム工場から排出される煙のためか、全パーム林がかすんで見え、空気の汚れが気になった。また、エビの養殖場跡だろうか、海岸近くに水のない区切られた空き地が多く見られたのが、海の汚れと共に気になった。この他、ランカウイ島は近くのペナン島に負けない第2のリゾート地都市にするため、税の免除など政策的に多くの人の共感をよぶ方針をとっているが、森林の伐採など目下開発中のところが多く、小川とその近くの海が濁っている様子と、そこで多くの人が釣りをしているのを見て、そこに生息する魚は大丈夫か気になった。クアラセランゴルを訪れ、ホタル(KLEP-KLEP)を鑑賞したが、ガイドの説明では、「この川の環境保護に力を入れているが、それでも川の汚れで年々ホタルが減少している」、とのことであった。あの素晴らしいホタルと美しい海を残しておいて欲しいものだと思う。

新聞で知ったのだが、シンガポールに通勤している人が4万人もいる(ジョホール州に多い)とのことであり、その人々に対し、手足を洗いうがいをするよう呼びかけていた。理由は子供達に手足口病(HFM)が流行し、ジョホール州では3才の男児が最近死去したほか、362人が患っているとのことで託児所や幼稚園も閉鎖になったところがあるためであった。

石油価格の値上げに伴う便乗値上げを監視するため政府は、「生活必需品価格監督委員会」を設けたという記事が載っていた。いづれの国も便乗値上げがあるのだなと思った。

変わったところでは、サバ州で体長5m重量200kgもある人喰いワニがコタキナバル郊外の川で捕獲されたのが写真入りで報じられていた。今年の7月、8月に小学2年生の男児と村長を食べた悪いワニだそうだ。ランカウイ島でワニ園を見学して大きなワニを見てきただけに驚嘆した。

## ② 岩田 美穂子「はじめてのマレーシア体験」

アフターケア調査団の一員として、今回初めてマレーシアを訪れた。マレーシアという国についてあまり情報を持たない私にとっては貴重な体験となった。まずマレーシアが南シナ海を挟んで東西に別れていることも初めて知った。多民族国家であることはある程度知ってはいたが、宗教の違いから生活習慣にも違いがあることを詳しく知ることとなった。人々の生活で気がついたことを何点か述べることにする。

- ・夜が遅い。夕食は9時頃が当たり前、送別会で結婚式に出くわしたが、披露宴は夜の9時からだという。レストランの開店時間も7時からがほとんどであった。
- ・食事の回数が多い。朝食、朝おやつ、昼食、昼おやつ、夕食というように、日に5度も食事をとる。おやつもサンドイッチやビーフン炒めなどがしっかり出てくる。味もどちらかというと辛目が好きなようだ。
- ・アルコールはイスラム教では禁止されている。しかし中国系や、インド系では飲んでも良いらしく、マレー系のレストラン以外ではちゃんとおいてある。
- ・車社会である。クアラルンプールの中心地は交通渋滞が常で、道は複雑。信号付の横断歩道はあまり無く道を横断するのは至難の業であった。郊外へつづく高速道路は広く、スムーズで、多くの人は遠くから車で中心地に通勤するのが当たり前のようであった。
- ・マハティール首相の力が強い。どこへ行ってもマハティール氏の写真や絵が飾られ、テレビも新聞もマハティール氏の内容が多い。政権も安定しているようで、日本ではちょっと考えられない感じであった。
- ・英語が通じる。しかし民族によって話す言葉は違う。他の民族との交流には英語、自分達の民族間は母語と、使い分けている。例えば中国系の人なら家で中国語、公式な場ではマレーシア語、日常的な場は英語となる。英会話が貧しい私にとってはうらやましいことである。
- ・成長著しいマレーシア。郊外には新しい住宅がどんどん建てられ、街にはKLタワーやツインタワーに象徴されるように近代化が進んでいる。夜の空港から街へ向かう車の中で見たツインタワーはまるで宝石のようだった。

このほか色々と感じたことはあったが、印象深いものをいくつか上げた。

③ 前山 絹代「アフターケア調査チームに参加して」

今まで何回かホームステイの受入れをし、「いつかまた逢いましょう。」と約束しながらも現実には至っていなかった。

1997年度青年招へい事業で我が家にホームステイをしたロスリムさんは、帰る時に感謝の言葉と、「私の住んでいる所はマレーシアでも特に自然がいっぱいで美しいところだから是非来て欲しい。」と念をおしていた。そして、私の友達の家には観光局に勤めるシャリムさんがホームステイに来ていた。彼は観光ビデオ(日本語)を持ってきており、私たちにマレーシアをアピールした。そのビデオは政府の政策のものであり、美しい自然とKLタワー、ツインタワーなどが映し出されていた。そのようなことが思い出され私のマレーシア訪問は現実となった。

マレーシア新空港に着いた時は正直言ってびっくりした。空から見たのとは大違い、立派の一言につきる。そして暗闇にきらきらと輝きながらそびえ立つKLタワーとツインタワーも目を見張るものであった。「一体マレーシアってどんな国?日本の何が必要なの?」と、私の内に疑問符が湧いた。次に驚いたのはホテルの夕食であった。夕食そのものより、もう10時はまわっているのに沢山の男女が食卓を囲んでいた。そして奥の方ではオープンスペースのバーがあり、生バンドの演奏と歌がジャンジャン鳴り響いていた。後でわかったことなのだが、マレーシアでは1日5回食事をとり、サパーは9時か10時が当たり前ということであった。アイダさんのお宅へ訪問したときも到着したのは午後8時頃で、それから夕食会が始まった。「日本でこの時間によそのお宅へ訪問するのはとても気が引ける。」と一寸恐縮しながらおじやました。しかし、ご主人をはじめ家族の方々が笑顔いっぱい迎えて下さり、マレー料理をごちそうになった。今日初めてお会いするという気がしなかった。おばあちゃんの手がとて可愛く印象的であった。

翌日には私の家へホームステイしたロスリムさんの住むケダ州アロースター市へと飛んだ。午後9時頃に着いたにもかかわらず3人もの同窓会青年が迎えてくれた。この日も青年達と共にした夕食は10時をまわっていた。ジビンさんとロスリムさんの案内で、ケダ州で一番人気のあるランカウイ島訪れた。まず目に飛び込んでくるのは雄大な白い首の大きな鷺だった。クラン・タンという名前でランカウイ島の由来だということだった。伝説の公園内は広くきれいに整備されており沢山の観光客や家族連れにであった。ケダ州では農村が広がり、ここでやっと観光マップにあるような高床式の住居を見ることができた。クアラルンプール郊外と同じようにここにも所々に新築の家や、建築中の家が海を見渡せる場所に見られた。これらもケダ州で話に聞いたシルバープランの一環なのだろうか、彼らはしきりに「シルバープラン」、「シルバープラン」を連発していた。ジビンさんは自分の息子が来年ジュニアフレンドシッ



プに参加することをとても喜んでいて、彼らの内にフレンドシップでの日本への思いはまだ熱く、日本人の私たちに本当によくしていただき有り難かった。クアラルンプールに戻る直前にアロースターのパラ・マサ(夜市)を案内してくれた。薄暗い中、ローソクと裸電球の光の中で日用雑貨から食べ物、洋服まで何でも揃っていた。氷もない台の上に鶏や牛の頭など一頭分の肉が解体され並べられていた。魚介類も氷の上ではなくそのまま並べられていた。焼き菓子、焼き鳥など様々なものが並び、牛の顔の前をマレーシアの人達は何事もないように歩いていった。複合国家の一片を垣間見たような気がした。我々の計り知れないところは多々ある中、日程は過ぎていった。

この体験で強く感じたことは、フレンドシッププログラムに対するPAMAJAの熱い思いと結束力であった。彼らの言葉の中に自分のためだけでなく自国のため、自国の発展のために役立ちたいという思いが伝わってきた。「マレーシア人に夢を持たせて努力する人間を育てる。」というこの国の方針に当てはまっているように思えた。そして、マレーシア人の気質の良さからか、彼らは私たちにいつも気を配ってくれた。彼らの少しのんびり見える性格は、暖かい気候と豊かな自然環境から育ったためだろうか。女性はいつも笑顔で男性はいつも明るく情熱的、私はそんな彼らがとてもすてきに見えた。彼らの熱意とシルバープランを陰ながら応援したい。そして再びマレーシアを訪れることを願う。

#### ④ 南 祐貴子「マレーシア調査団に参加して」

これまで何度かJICA 青年招へい事業を受け入れてきて、毎回どうしたら彼らにとってよりよい研修になるかを考えてきた。今回マレーシアを訪れこの研修の背景を自分の目で見て、初めて受け入れられる側に立ってみて、まだ配慮できる部分があることを私自身考える良い機会になった。今までも、訪問箇所が多いとか、スケジュールがハードだとかいう要望があったが、短い日程の中で見せたいものが多いとどうしてもハードになりがちで、どうしようもないとは思っていた。しかし今回の訪問で時間や移動もハードだったため、青年達の来日の際にも移動を短くするとか、訪問箇所を減らして質疑応答をする時間を充分にとる、などの配慮も必要であるということが実感できた。青年達は人数が多いうえに、通訳を通すという煩わしさがあるので、充分に時間をとらないと知りたい情報を得られず不完全燃焼な研修になりかねないと感じた。しかし、マレーシアに関しては夜型の青年が多いので、翌朝ゆっくりとしたスケジュールをとれば多少遅い時間に研修が入っても大丈夫なのかもしれない。夕食もいつも早かったが、もう少し遅い時間でも大丈夫だと思う。昼食に関しても、もう少し時間をとれると、午後の研修に向けてのコンディション作りに役立つのではないかと思う。日程的にはハードだったが、マレーシアでは食事の時間で追われると言う

事はなかった。あと、食事では私達が辛いと思うものにも彼らはスパイス類をかけていたので、チリソースやタバスコ類は用意できるときにはつけておいたほうが良いと思う。また、回教徒がほとんどでお肉はハラミートでなくてはダメなので、来日時はいづれ肉をさけてしまうが、マレーシアでは本当に鶏肉がよく食べられている。マレーシア国内であれば彼らは何不自由なく肉を食べられるので、宗教上の食事制限のことをつい忘れてしまうくらいだった。一ヶ月の長い研修でもあるので、出来る限り配慮できるように考えたいとった。

このほか気がついたことでは、携帯電話が随分と普及してきているようで、大きなデパートに行くとも携帯電話販売コーナーが随分目に付いたことであった。小型のものもあるが、日本の一昔前のような大きさの携帯が多かった。マレーシアでは携帯電話は高価なもので、日本円で大体3~4万円くらいはするそうなので普通はリースをしていることが多いとの話。外国人だとデポジットで10万円預けなければならないということだった。しかし、来日青年でもかなりの人が携帯電話を持っていたし高価なわりに随分と普及しているようだった。携帯電話のある生活になれている自分としては、JICAからお借りした携帯で青年とダイレクトに連絡が取れ、随分と助かったことも多かった。アフターケアのプログラムはPAMAJAの仕事ということで、全面的にお世話になり、ラーマン会長にも何度も携帯で連絡をとらせていただいた。平日の勤務中であるにもかかわらず多くのサポートをしてくれたことに、職場での青年招へい事業への理解度を強く感じました。しかし、私たちの受け入れ青年でクアラルンプール近郊に住むメンバーが少なかったため、個人に多くの負担をかけたようで少し心苦しくもありました。とくに遅い時間であるにもかかわらず空港へ迎えに来てくださったたり、常に走り回っておいでたラーマン会長、観光局に勤めていて、「これも僕の大事な仕事だから。」とほぼ毎日夜遅くまでつきあってくれたシャリムさん、大事な資格試験のための休みにもかかわらずいつも顔をみせてくれたファジラさん、一緒にランカウイ島まで同行して案内してくれたジビンさん、ロスリムさん、仕事の合間に抜け出してわざわざ、さよならをいいに来てくれたアイダさん、感謝の言葉も言い尽くせません。本当にありがとうございました。

### (3) 提言

- ① 私たちがマレーシアについて十分な知識を持っていないのと同様で、来日青年にも日本についての知識が不足だと思われるので、従来より短縮されている現地事前研修会を延長して、日本についての勉強と青年同志の交流を考えることが必要ではないだろうか。

- ② JICA 青年招へい事業は友好青年団体のような民間団体が主力になって受入を展開しているが、もっと増やすべきではないか。PAMAJA の様な組織作りも必要だが、官から民への相互理解と協調性が生まれるためにも、ガバナンスを得られる場になる事業と思う。
- ③ 「青年招へい事業・21世紀のための友情計画」と表題が示す如く、21世紀に突入しようとしている今こそこの事業が結実し、花開く時と考えられる。国と国との結びつきは個人とのつながりにより、将来に伸びていくのであると言え、一人一人が国際貢献に尽くす本事業は大変重要である。このことは「個人間の友情作り＝友好国作り」「国際貢献＝日本への貢献」になるという基本構想でもって、予算面でも十分な配慮をお願いしたい。
- ④ マレーシア(回教国)ではメッカに訪れた人には「ハジ(Haji)」という呼称(洗礼名)が与えられる他、州の王様(スルタン)より「ダトゥ(Dato)」という爵位にあたる呼称を与えられた人もいる。これらはいずれも特別な人という意味を持ち、現地では尊敬されている様子であった。我が国と大いに異なった地位を示すことがあるので理解し、個人と接するときは宗教と共に注意が必要である。
- ⑤ マレーシアでは、来日青年の同窓会組織としてPAMAJAが活発な活動をしていることは、多くの人々の知るところではあるが、一度来日した青年は、二度目、三度目と機会がなく、活動も一部の人に依存しがちであるように感じられた。彼らの活動支援のためにも、目的を深く掘り下げた二度目の来日をする機会を作ってみてはどうだろうか。
- ⑥ 受け入れにあたって25～30人は、数としては妥当であるが、グループ内の青年は同一目的とは限らないので、地方プログラムでは青年を4～5人のグループに分け細分化した視察を考えた方が帰国後の活動に役立つと考えられる。
- ⑦ 今回はクアラルンプールのみでなく地方にも出かけたことは、プラスだったと思う。特にケダ州事務所、ケダ地域開発公社ランカウイ事務所においては、特性のある開発に力を入れている公社の方針(シルバープラン等)を知り、目にすることができたことの意義は大きい。今後も地方視察を入れると良い。

# バングラデシュ人民共和国

平成 12 年 11 月 19 日～ 27 日

財団法人 国際看護交流協会



## I. 調査目的

### 1. 調査目的

- ・ 帰国青年との再交流を通じ、日本とバングラデシュ（以下本文中はバ国）の相互理解の増進を図る。
- ・ 帰国青年の職場訪問や、ホームステイ等をとおして、バ国の保健医療を含む文化・社会事情を理解し、今後のプログラム改善に寄与する。
- ・ 帰国青年の所属先関係者に対し、事業の理解と支援を働きかける。

### 2. 調査内容

#### (1) JICA バングラデシュ事務所

- ・ JICA 活動概要およびバ国一般事情の聴取

#### (2) 在バングラデシュ日本大使館

- ・ バ国の一般事情の聴取

#### (3) 大蔵省経済関係局

- ・ 青年招へい事業参加者選考過程および帰国後のケアについての聴取

#### (4) 保健家族福祉省 (MHFW)

- ・ バ国の保健医療・衛生事情の聴取

#### (5) MHFW 母子保健研修所 (リプロダクティブヘルス人材開発プロジェクト)

- ・ JICA 専門家の活動現場視察

#### (6) ダッカ子供病院

- ・ 青年海外協力隊の活動現場視察

#### (7) JICA 同窓会

- ・ 活動内容の聴取

#### (8) 帰国青年活動現場

- ・ 病院概要の聴取および帰国青年の活動現場視察

(9) ホームステイ

- ・一般家庭に入って生活することによりバ国の文化・社会・生活習慣等を理解する

(10) ショートトリップ(シヨナルガオン地域)

- ・首都郊外を訪問することにより地方の状況を視察する

3. 調査団員

|      | 氏名    | 所属先             | 青年招へい事業との関わり               |
|------|-------|-----------------|----------------------------|
| リーダー | 新居 啓司 | 財団法人 国際看護交流協会   | 分野別プログラム<br>プログラム・コーディネーター |
| メンバー | 斉藤かおり | 静岡県立総合病院        | 分野別プログラム<br>合宿セミナー参加者      |
| メンバー | 吉谷 秀氣 | 東日本プラスチック健康保険組合 | 分野別プログラム<br>合宿セミナー参加者      |
| メンバー | 渡辺 悦子 | YMCA バングラデシュ    | 分野別プログラム<br>合宿セミナー参加者      |

II. 調査結果

1. 日程

11月19日(日)

- 10:30 成田空港発(TG641)
- 15:30 バンコク国際空港着

11月20日(月)

- 10:45 バンコク国際空港発(TG321)
- 12:15 ジア国際空港着
- 15:00-16:00 JICA バングラデシュ事務所訪問

11月21日(火)

- 09:30-10:00 在バングラデシュ日本大使館訪問
- 11:00-12:30 帰国青年活動現場訪問1(Dhaka Medical College Hospital)
- 14:30-15:30 保健家族福祉省(MHFW)訪問
- 16:30-17:00 大蔵省経済関係局訪問

11月22日(水)

- 09:30-11:15 帰国青年活動現場訪問2 (Tejgaon Thana Health Complex)
- 12:00-13:30 帰国青年活動現場訪問3 (Shaheed Suhrawardy Hospital)
- 15:00-16:00 私立病院訪問 (Aichi Ma O Shishu Hospital)
- 17:30-18:00 JICA 同窓会訪問

11月23日(木)

- 08:30-10:15 MHFW母子保健研修所(リプロダクティブヘルス人材開発プロジェクト)訪問
- 11:00-13:30 ダッカ子供病院訪問(青年海外協力隊看護隊員活動現場)
- 14:00-17:00 ダッカ市内視察
- 18:30-20:00 帰国青年主催交流会
- 20:30- ホームステイ

11月24日(金)

- ホームステイ
- 20:00-21:00 同窓会・調査団共同主催交流会

11月25日(土)

- 08:30-17:00 ショートトリップ(シヨナルガオン地域)

11月26日(日)

- 09:15-09:45 JICA バングラデシュ事務所訪問(報告)
- 10:00-12:30 ダッカ市内視察
- 13:25 ジア国際空港発(TG322)
- 16:40 バンコク国際空港着

11月27日(月)

- 08:45 バンコク国際空港発(JL708)
- 16:15 成田空港着



2. 主要面談者

(1) JICA バングラデシュ事務所

|    |       |
|----|-------|
| 所長 | 岡崎 有二 |
| 次長 | 木邨 洗一 |
| 所員 | 安藤 洋子 |

(2) 在バングラデシュ日本大使館

|       |       |
|-------|-------|
| 二等書記官 | 石堂 憲二 |
|-------|-------|

(3) 大蔵省経済関係局

|                         |                   |
|-------------------------|-------------------|
| Deputy Secretary        | Mr. Kamrul Hassan |
| Sr. Assistant Secretary | Mr. Md. Emran     |

(4) 保健家族福祉省

|                 |                              |
|-----------------|------------------------------|
| Joint Secretary | Mr. Mir Shahabuddin Mohammad |
| Joint Secretary | Mr. Shaikh Shabi Ahmed       |
| 職員(平成11年度保健医療)  | Ms. Thamina Akhter           |
| 職員(平成11年度保健医療)  | Ms. Islat Hafiz              |
| 医師(平成11年度保健医療)  | Dr. Baizid Koorshid Riaz     |
| 職員(平成11年度保健医療)  | Mr. Md. Mofizul Islam        |

(5) 保健家族福祉省母子保健研修所(JICA リプロダクティブヘルス人材開発プロジェクト)

|                |                       |
|----------------|-----------------------|
| コーディネーター       | 間宮 志のぶ                |
| 専門家(産婦人科)      | 石原 由起                 |
| 専門家(臨床検査)      | 森川 泰夫                 |
| 専門家(医療情報)      | 丹波 正一                 |
| Superintendent | Dr. Rahima Ali        |
|                | Dr. Nazrina Begum     |
|                | Dr. Aleya Ferdousi    |
|                | Mrs. Aleya Begum      |
|                | Mr. Md. Golam Mostafa |

(6) ダッカ子供病院

|               |      |
|---------------|------|
| 青年海外協力隊員(看護婦) | 齊藤 恵 |
|---------------|------|

- |                                    |                                |
|------------------------------------|--------------------------------|
| 青年海外協力隊員(看護婦)                      | 坂 扶美江                          |
| 医師(平成 11 年度保健医療)                   | Dr. Abdul Hanif                |
|                                    |                                |
| (7) Aichi Ma O Shishu Hospital     |                                |
| 医師                                 | Dr. Moazzem Hossain            |
|                                    |                                |
| (8) 帰国青年同窓会                        |                                |
| General Secretary                  | Mr. Azmal Chowdhury            |
| Vice President                     | Mr. Golam Kibria Bhuiyan       |
| Treasure                           | Mr. Shamsul Alam               |
| Organizing Secretary               | Mr. Md. Abdul Malek            |
| Games Secretary                    | Ms. Hosne Ara Khanam           |
| Executive Member                   | Mr. Ekramul Haque              |
| Executive Member                   | Mr. Atiur Rahaman              |
| Executive Member                   | Ms. Dilara Rahman              |
| Executive Member                   | Mr. Sultan Mahmud Khan         |
| Executive Member                   | Mr. Masudur Rahman             |
| Executive Member                   | Mr. Sirajul Kabir              |
| Publicity Secretary                | Mr. Saleh Ahmed                |
| Joint Secretary                    | Mr. Aym Hasmata Ullah          |
|                                    |                                |
| (9) Dhaka Medical College Hospital |                                |
| 院長                                 | General Dr. Badrul Nunir       |
| 医師                                 | Prof. Tofayel Ahmer            |
| 医師(平成 11 年度保健医療)                   | Dr. S. M. Mahabubur Ruhman     |
| 医師(平成 11 年度保健医療)                   | Dr. Md. Shahjahan              |
| 医師(平成 11 年度保健医療)                   | Dr. A. K. S. Zahid Mahmud Khan |
| 医師(平成 11 年度保健医療)                   | Dr. Md. Nazumul Islam          |
|                                    |                                |
| (10) Tejgaon Thana Health Complex  |                                |
| 所長                                 | Dr. Mahboob Iqbal              |
| 医師(平成 11 年度保健医療)                   | Dr. Baizid Khoorshed Riaz      |
| 医師(平成 11 年度保健医療)                   | Dr. Khandaker Ahmedul Haque    |
| 職員                                 | Ms. Dil Ara Begum              |

職員

Ms. Monira Begum

(11) Shaheed Suhrawardy Hospital

院長

Dr. Qazi Shahidul Alam

医師

Dr. Motiur Rahman Molla

医師(平成11年度保健医療)

Dr. Shamiul Alam Bintu

医師(平成11年度保健医療)

Dr. Kamrul Hasan

3. 調査結果概要

短い調査期間で、多くの帰国青年と再会し、変わらぬ友情を確認することができた。

帰国青年の職場等を訪問することにより、職場での帰国青年の役割、職場が青年招へい事業への参加を全面的に支援していること、また、バ国の保健医療・衛生状況などについて理解することができた。

ホームステイでは、帰国青年の家庭に入り生活を共にすることにより、一般の人々がどのような生活をしているのか、バ国の文化・習慣などを直に肌で感じながらベンガル人の生活を垣間見ることができた。

また、JICAプロジェクトや青年海外協力隊の活動現場、一般の私立病院などの視察をとおり帰国青年の職場と比較することで、総合的にバ国の保健医療事情を把握し、青年がどのような状況でどのような活動をしているのかをより深く理解することができた。

これらの調査結果を今後のプログラム策定にフィードバックし、より効果的なプログラムの計画・運営ができるものとする。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

① JICA バングラデシュ事務所

JICAはODA予算から20億円程度を使って、バ国に対する技術協力を行っている。JICAは、以前は農村開発等の分野に重点を置いて協力活動を実施してきたが、最近では教育や保健衛生分野での協力を重点を移しつつある。

研修員の受入れは、平成12年度計画で総数146人の内、保健医療分野は22人を占めている。一方、日本からの保健医療分野での専門家派遣は、保健家族福祉省母子保健研修所(MCHTI)(リプロダクティブヘルス人材開発プロジェクト)に現在、5名の長期専門家、2名の短期専門家を派遣中である。青年海外協力隊員は、同国に43名派遣されている隊員の内、保健医療分野は10名(内訳ポリオ対策6名、保健婦1名、看護婦3名)である。

無償資金協力では、医療分野においては第2次ポリオ撲滅計画(平成11年度完了)、母子保健研修所改善計画(平成12年6月30日工事完工)の案件をJICAが担当している。

JICAは、国際協力事業団法により、二国間援助(バイ)が基本であるが、最近では二国間、および多国間(マルチすなわち国際機関を通じる援助)でそれぞれの長所を活かしつつ、両者を有機的に結びつけて実施するマルチバイ援助が増加してきている。

最近ではドナー国も、政府を通さずに、小回りがきくNGOに直接援助する動きが増加してきたため、政府との軋轢も生じてきた。そこで、NGOビューローに登録して、政府銀行経由で資金提供を受ける仕組みをつくっている。JICAもシャプラニール等のNGOとの協力関係を推進している。

バ国では、女性の平均寿命が男性よりも短いという世界的に見ても特異な状況である。妊産婦死亡率の高さが主要な原因であるが、女性の地位の低さの表れともとれる。リプロダクティブヘルスの改善は、依然としてこの国の重要な課題の一つである。

保健家族福祉省は、もともと別の省庁であった保健局と家族計画局との連携がスムーズでなく、事業の重複もあり、非効率的である。平成10年7月から保健人口分野での第五次五ヵ年計画として世界銀行主導の改革が進められ、保健人口セクタープログラム(HPSP)が開始されている。この計画は、効率的な財源活用を促進し、保健局と家族計画局の2局構造を統合し、効率的な人的資源の活用を図るものである。実施政策は、セクターワイドのアプローチがとられており、プロジェクト別でなく、セクター総括チームが企画運営している。ただし、MCHTIはプロジェクト方式で実施されている。従前よりサービスの内容も改良し、人々のニーズに応えるサービス(ESP: Essential Service Package)を提供している。対象となる人々には、健康に対する認識をInformation、Education、Communicationの機能を活かしてトランスフォームし、行動変容につなげている。

日本とバ国の間には異なる点が多いが、食文化の差も大きい。バ国青年が日本に来て困った問題の一つに食事があげられる。彼らはカレーしか食さないのである。したがって日本の食事はうすく感じられるらしい。ホームステイで受け入れを成功させるためには、このようなところも理解しておくことが重要である。

貧困もバ国の抱える重大な問題である。バ国政府は貧困解消のために外国からの投資を促進したいと考えている。しかし、電気・水道等のインフラストラクチャーの整備が遅れているため、進出企業の誘致もなかなか思うように進んでいない。また、ハルタルも外国企業の進出を妨げる一因となっている。ハルタルとはいわゆるストライ

キのことであり、野党が与党に対して政治的圧力をかけるために実施する。ガンジーの非暴力運動もハルタルの一種である。ハルタルの期間中は車のエンジンをかけること、官公庁の事務、商店での販売等ほとんどの経済活動が停止となる。平成8年には、史上最長の137日間にのぼるハルタルがあった。この時経済は極度に疲弊し、これ以上のハルタルは今後ないであろうと言われている。現在のハシナ政権は、在野してもハルタルをしないことを公言している。

青年招へい事業での青年の派遣は、今後、保健医療、福祉、教育、中小企業などの分野から5年ごとのローテーションで派遣する予定である。以前、保健医療グループでは、医師以外の医療職も派遣していたが、失踪問題が生じたため、平成11年度は全員が保健家族福祉省勤務の医師もしくは行政官であり、ほとんどがダッカ在住者であった。選考過程では、何事も文書で事を運ぶため意思決定が遅く、非常に手間がかかる。地方の医療職にも参加してほしいのだが、地方には参加基準を満たす人材が乏しい。しかし、HPSPに関連して医師を積極的に地方へ派遣する通達が出ており、今後この問題は改善の方向に向かうであろうと思われる。

## ② 在バングラデシュ日本大使館

在バ国日本大使館は、ダッカ市のバリダラ地区にあり現在22人の日本人とローカルスタッフを合わせて50人で運営されている。今回の訪問では、招へい青年との関わりと、アフターケア調査の主旨について説明を行った。担当者から、バ国では、医療協力においても日本が大きな役割を占めていること、保健医療を含めた教育システムである保健人口セクタープログラム(HPSP)に日本も同調した協力を実施しようとしていることなど、日本の援助の姿勢についての説明があった。

## ③ 大蔵省経済関係局

援助の受け入れ窓口機関である大蔵省経済関係局(以下、ERDと略)では、青年招へい事業における参加者募集方法、選考方法、また帰国後のケアについて話を聞いた。

青年招へい事業参加者の選考は、1998年まで関係省庁・部局が直接の責任を負っていた。しかし、1999年以降は下記の手順で選考を行っている。この方法は、在バ国日本大使館、JICAバ国事務所からも認可されており、ERDはこの選考方法の遵守に努めている。

### a. 選考方法

第一に、日本政府からERDに対し、関係省庁・部局から青年招へい事業に参加する約20名の国家公務員を選考するよう公式要請がなされる。次にERDは、関係

省庁・部局に対して、20名の招へいグループの場合、参加人数の2倍の約40名の候補者を以下の基準に従って選考するよう要請する。(1.大学卒業もしくはそれと同等以上であること。2. Class I以上の地位にある国家公務員であること。3. 英語が堪能であること。4. 年齢が19歳から35歳の間であること。5. 男女比が適切であること。)この時、少数民族も候補に入れるよう配慮する。また、地域バランスも考慮する。

候補者リストを関係省庁・部局から受領後、ERDは選考委員会を設置する。この委員会はERD、関係省庁、在バ国日本大使館、JICAバ国事務所の代表者で構成される。選考委員会は、候補者に対し面接し審査を行う。この審査結果に応じて20名の候補者と4名の補欠が決定される。

この24名の中から最終的にJICAが20名の参加者を決定する。

出発前に、参加者は、JICAバ国事務所において、日本でのプログラムについてブリーフィングを受け、同時に同事業の帰国青年と質疑応答の機会を与えられる。

#### b. 帰国後のケア

帰国後は報告会が用意されており、日本での経験を共有することで、日本への理解がより深まり、また、今後の事業改善への示唆もここで得られる。ERDとしては、予算さえ整えば、帰国青年たちの研修成果をフィードバックするプログラムを実施することを希望している。またさらに、彼らの経験を最大限に活かすよう適したポストを用意していく予定である。

#### ④ 保健家族福祉省

平成11年度医療グループの帰国青年のすべてが所属する保健家族福祉省では、関係局長2名から、日本で青年が保健医療関連施設、日本青年医療職との合宿セミナー、地方でのホームステイをとおして、日本の医療事情、社会、文化を知り、また、日本人との様々な交流によって両国の友好親善に寄与できたと高い評価が聞かれた。

局長からは、同省の政策の概略について説明を受けたが、やはり財政面で援助の必要性を強調しており、具体的には外国資本による病院の設立を期待していた。また、バ国と日本の大きな違いの一つに、バ国には公的医療保険が無いということがあげられており、この問題に対処するため現在モデル地区(シレット県)を設けて医療保険システムを試験的に導入しているとのことであった。バ国の抱える保健医療問題として、人口増加に対する問題、母子保健、HIVをはじめとする感染症を挙げている。このような問題は、地方(村)で深刻化しており、対策として政府は人口6,000人に対し、クリニックを1つ設立するようにしているとのことであった。また、人口抑制と栄養

改善が最優先課題であるとしている。

⑤ MHFW 母子保健研修所(リプロダクティブヘルス人材開発プロジェクト)

JICAからプロジェクト専門家が複数派遣されている。母性の保護をポリシーとする当研修所では、母子保健の向上のため様々なことが実施されている。案内された広いトレーニングユニットでは、地方に勤務している医師、助産婦のスキルアップをはかるためのプログラムが実施されている。中でも家族計画指導については、力点がおかれているとのことであった。また、期間を決めて、緊急産科処置、母乳促進のコースが用意されている。トレーニングユニットの部屋の中には、胎児の模型が置かれてあり、一目見ただけで妊娠の経過がわかるようになっている。

JICAプロジェクト専門家、産婦人科の石原医師の案内で病棟内を見学した。合計64床のベッドは、常に患者が待機している状態とのことであった。帝王切開や産後のトラブルで入院するケースが多い。普通分娩後は、平均24時間以内、帝王切開では平均2~3日で退院していくケースが多いとのことであった。医師は、本当はもっと長く入院管理をしたいのだが、新しい患者が待っているのも、それは不可能とのことであった。妊産婦がいかにも、この施設に多くを期待しているかということがよく理解できた。ここには、分娩台が計5台、手術室は計2部屋ある。分娩室の隣に陣痛室が併設されており、妊婦を思慮していることがうかがえた。

病棟内スタッフは、麻酔科医が2名、産婦人科医が2名とのことであった。土、月、水曜が妊婦検診、日、火、木曜が5歳以下の子供の検診日となっている。私たちが訪問した日は、火曜であったので、子供とその母親が多数待合室で待っているという状態であった。最後に、超音波室を案内してもらった。超音波の検査代は約110タカで、決して安くはない。1日平均20人程検査を実施する。超音波室には、印象的なスローガンが掲げられていた。それは、英文で“*We will not tell the fetal sex.*”と記されていた。バ国では、多くの母親が男児の出生を望む。従って、胎児が女児だと分かると人口妊娠中絶を行ってしまうケースがあるそうだ。胎児の人権、生命の尊重のために超音波検査で胎児の性別が判明してもそれを伝えないというポリシーを貫いている。このことにも深い感銘を受けた。

医療廃棄分の管理が徹底されており、予防接種後の注射針や血液で汚染されたものは分別されていた。JICAプロジェクト専門家は、母子保健の向上という目標に向かって現地の方たちのために尽力していた。

日本の社会の中では、母性は保護され、男女の地位も平等となっている。しかし、ここバ国では、文化的・宗教的背景から女性の地位は低く、それが母子保健の向上を妨げているようだ。その他にも、女性の職業である看護婦の地位も低い。当然、それ

は、看護教育にも悪影響となる。看護婦教育が不十分では、患者に良いケアを行うことができず大きな問題を生み出すことは予測がつく。“女性の地位が低い”という一国の文化を急に変えるのは難しい。しかしながら、“母性の保護”というのは、国を問わず重要である。そういった意味でこの施設は、大切な機能を果たしていることが分かった。

患者の施設に対する満足度を知るために調査もしている。その中には、看護婦の患者に対するサーベイも含まれており、看護婦の行動変容を生み出す良いチャンスであることがうかがえた。帰国青年の1人である Ms. Zakia Akhter は、日本の病院を訪ねた時、衛生観念や看護職のマナーの良さに驚いたようだ。彼女は自分の経験を、自国に戻って上司に報告する機会があったようだ。日本の医療施設の長所を取り入れながらバ国の文化に合った医療施設を目指したいという彼女の意見に大きく納得することができた。

#### ⑥ ダッカ子供病院(青年海外協力隊活動現場)

バ国の乳児死亡率は依然として高い数値を示しているにもかかわらず、人口の約3割を占める乳幼児・小児層に対する保健医療水準は未だ低い状態にある。このような状況を改善するために1977年、当国唯一の小児総合病院であるダッカ子供病院が設立された。同病院の昨年度の予算は4,247,000タカ(約150万円)であり、その内訳は政府補助金(53%)、病院収入(35%)、寄付(12%)である。

病床数は全部で345床。そのうちの60%が無料ベッドである。病棟は内科・外科・栄養病棟・緊急観察病棟・手術室・術後回復室・集中治療室(8床)がある。集中治療室においては、レスピレーター(人工呼吸機)を3台持ち、2日までは無料、以降はお金がかかってくる。平均入院日数は5.68日である。外来部門には内科・外科・レントゲン室・臨床検査室・小児指導室・家族計画・発達外来・予防接種・耳鼻科・皮膚科などがある。1年で150,000人以上の患者が来院する。(約450～500人/日)

現在理事長は Ms. Syeda Firoza Begum、院長は Dr. Monzur Hossain である。特に院長は88年から93年にかけて JICA とバ国政府共同事業のリウマチ対策プロジェクトに参加し、日本人専門家と共に活動した経歴もあり、JICA及びJOCVへの理解も深い。

また、当病院では小児科医においては権威あるところであり、小児科医の99%がここで研修を受けている。しかしながら、看護婦の教育システムは未だ確立されておらず、JOCVに頼っているのが現状である。今後の方針としては、医者や看護婦の数が不足していることも含め、積極的に教育を促し、教育水準を上げたいとしている。

現在、当病院には日本から2人の看護婦が協力隊員として派遣されている。彼女ら



は、それぞれに日常の業務を通じて院内の問題点を把握し、様々な形で改善に努めていた。

1人は病院の看護婦の教育システムにかかわり、特に卒後教育について看護総婦長と話し合いをしながら改善を進めている。主なものには、患者への適切な酸素療法普及の為に一般特別機材として昨年10月に酸素中央配管システムを設置(総予算790万円)し、それまでポンペで対応していたものから切り替える為の実技指導をしている。

まず、中央配管を設置する前に講習会を開き知識を備えてその後、一人一人の看護婦に対して酸素療法の確認や酸素の過剰投与の危険がないかなどのチェックを行っている。活動開始後1年7ヶ月たち、みんなのレベルがアップしたと評価できるのは、注意することが少なくなっているからだと言っていた。しかし、教育することの困難はただ教えるだけではなく、当病院の看護婦自身が自主的にレベルを上げていかななくてはならないことだ。結局、婦長レベルの看護職に日本の看護婦(協力隊員)が指導しても、プライドの高いバ国においては受け入れられにくく、そのために現場教育と集団教育を上手に組み合わせることが大切になっている。日本の看護婦が現地の看護婦に問題提起をし、現地の看護婦同士でディスカッションすることで自主性を高め、お互いを刺激し合い、意識の向上を図ろうと試みている。

もう1人の隊員は内科病棟に配属されており、看護婦や患者に対する指導をしている。

彼女はここの看護婦には、まだ「患者を見る、観察する。」ということが欠けており、看護の質の向上に向けて活動をしている。そこで、病院の中で目の当たりにする看護婦の地位の低さについて尋ねると様々な問題が出てきた。まず、看護婦になるためには4年間の勉強が必要となり、そのうち1年間は助産婦の勉強が必須である。1年ごとに国家試験を行い進級し、4年後に免許を取得する。そのシステム自身はしっかりしたものだが、看護婦の絶対数が不足し、その上業務量が多く、結局のところ医師の指示周りや状態チェックだけになってしまうということである。

では、なぜ看護婦の数(学校も)が少ないかということ、宗教の問題が大きく関わってくる。ここはイスラム教の色が濃く、男性に比して女性の地位が低い社会では、女性の進展は遅く地位が認められにくい。それ故、看護婦になりたくてなった人は少なく、看護職という業務に対する意欲も薄くなっている。看護師も数は少ないが存在しているものなり手は少なく、病人の世話は女性の役割という考え方が背景にあるようだ。このような社会意識の中で、少しでも看護婦の地位が向上するようにと、協力隊員達は日々奮闘している。

また、JICAからの支援として様々な医療器具が設備されてきたが、実際の技術が伴わない現実や、当病院において15年もの間看護婦隊員が派遣され、様々な教育を

してきたが故に、そろそろ協力隊員が引き上げ、現地の人達だけでやってみてもいい時期なのではないかとの指摘があった。

#### ⑦ Aichi Ma O Shishu Hospital

日本のボランティア団体JBCSが支援する私立の病院であり、日本へ留学経験のある医師が数名所属しており、Dr. Moazzem Hossain もその一人である。スタッフは専門医が8名、研修医が8名、看護婦が16名であり、産婦人科、小児科に力を入れている。医療機器も一通り揃っていて、ベッド数25床のうち15床が個室であり、療養環境はかなり良い部類に入る。医療の質の良さだけでなくアメニティに対するこだわりも感じられる。駄菓子屋が併設されていて、来院した子供へのサービスとしてだけでなく、近所の子供たちにも親しまれている。

手術は、胃腸閉塞、帝王切開、胆石除去、ヘルニアなどが多く、小児科の手術件数は一月に80件ほどあるが、Dr. Moazzem が内50件ほど執刀している。出産後の入院日数は、国立病院と同じく1日が標準である。日本と比較すると短い、バ国では一般的に産婆の立会いもなく自宅で分娩する者も多い。伝統的分娩方法では、出産時に竹でヘソの緒を切るため破傷風にかかりやすいという。

国立病院と比較すると、施設・スタッフともに恵まれているが、普段受診機会の少ないスラムの人たちに対してボランティアサービスを行っていて、毎週木・金曜日に無償で診察・投薬を実施している。

#### ⑧ JICA 同窓会

JICA 同窓会は、青年招へい事業帰国青年を含む JICA 研修プログラム参加者 OB・OG を主に構成されており、1979年11月の設立当時、30名程度だった会員は現在900名を超えている。また、全 JICA 研修員の55%がこの同窓会の会員になっている。平成11年度保健医療グループ帰国青年は、すべて同窓会の会員になっている。また、運営費については、主に JICA からの補助金と会員からの会費で賄われている。本同窓会設立の趣旨は以下のとおりである。

- ・ 会員相互の友情を深める。
- ・ 技術・情報交換のために JICA や日本の研修機関との結びつきを強化する。
- ・ バ国と日本の友好協力の促進。
- ・ 他国の JICA 同窓会との交流関係の構築。
- ・ 青年海外協力隊やその他 JICA 関係者に対する語学研修や宿泊先の斡旋。

また、同窓会の具体的な活動は、次のとおり。

- ・ 月1回の理事会の開催。

- ・年次総会の開催と同時に文化交流や夕食会を開き会員相互理解を図っている。
- ・年1回ピクニックの開催。
- ・2年に1回、理事の改選を行っている。
- ・国内外で関心の高いトピックに関するセミナー開催。
- ・季刊誌「ニュースレター」の発行。
- ・年報「THE SUNSHINE」を発行し、帰国青年たちの各専門分野での研究成果等の論文を掲載している。
- ・JICA 同窓会を冠にした一般公開学術会議の開催。1999年度は、“CANCER PREVENTION AND CONTROL IN BANGLADESH”というテーマで開催された。
- ・JICAの青年招へい事業を含む各種研修参加者に対し、出発前、日本に関するブリーフィングを行っている。
- ・病気の人々への食事の提供、入院中の貧しい子供達への衣類の提供、Gazipur地区のNilerpare村を“JICA村”と指定し、植林をはじめとする村落開発事業も実施するなど多くの奉仕活動を行っている。

## (2) 帰国青年活動状況

### ① Dhaka Medical College Hospital

Dhaka Medical College Hospital (以下 DMCH) は、1,400床の国立医科大学付属総合病院である。医師数は300人、看護婦数は565人。救急部門は24時間機能している。外来患者は、1日平均2,000～3,000人。医療費は基本的に無料であるため外来部門も入院ベッドも常時患者が溢れているとのことであった。DMCHでの死亡原因第一位は交通事故による怪我、次いで脳卒中、悪性新生物、心疾患、術後合併症となる。また、この病院での1日の平均出生数は30人で、平均死亡数は16人である。出産後の入院日数はたったの1日で、日本との大きな違いを実感した。感染防止については、医療物品の滅菌や注射器等のディスプレイ制は、徹底して実施している。病棟見学後、ナースステーションにて、現場の看護婦たち話をする機会を与えられた。看護婦の勤務体制は3交代制を採っている。看護婦が足りない場合、看護婦不足をアルバイトで補うということは禁止されているので、国立病院間でスタッフの調節を行っている。

帰国青年は、医師として、各病棟で責任ある立場にあり、誇りを持って働いているが、ここは常時患者で溢れており、一人一人に十分な医療技術を提供できないと嘆いていた。また、日本の医療機関と比較して、バ国の医療設備の質は10%以下だと言っていた。彼らはそのような現実を理解しながら、日々の忙しさに対応するので精一杯の様子であった。ただ、どの青年からも日本の医療水準に追いつきたいという声が聞

かれ、彼らが日本で多くの“気づき”があったということを察することができた。

## ② Tejgaon Thana Health Complex

この診療所の役割は大きく3つに分かれている。

### a. 外来兼救急医療

24時間の外来窓口を持ち、救急にも対応する。月約4,000人が外来受診し、そのうち約800人が緊急で他の病院へ運ばれている。外来患者の主な疾患は、下痢、交通事故、発熱である。基本的に薬は無料だが、絶対数が不足しているため本来なら1週間必要なところを2日分しか提供できないのが、問題になっている。

### b. 母子保健

5歳以下の子供に対して、ジフテリア、破傷風、ポリオ、麻疹、百日咳、TB等の予防接種を行う。また、国が9月15日を「予防接種の日」と定め、ポリオ絶滅を目指し活動している。1995年からポリオ絶滅に向けて力を入れ始め、ポリオ・ゼロを目標に奮闘しているが、現状は厳しく、実際にゼロになるのは2003年くらいであろうと予想している。

### c. 家族計画指導実施・教育

希望する男性に対しては、パイプカット、女性は結紮を施術する。家族計画が必要な背景には、バ国の急激な人口増加問題がある。国も政策として、35歳未満の女性に対し、2番目の子供が2歳以下の場合、避妊手術を受けると275タカの報奨金を与える制度を導入して人口増加に歯止めをかけようとしている。

今回の訪問では、帰国青年をはじめとするヘルスコンプレックス所長、スタッフ総出の大歓迎を受けた。少ない医療スタッフでたくさんの患者を診なければならず、帰国青年はコンプレックスの要の母子保健と家族計画の指導医師として業務を支えると共に、バ国の青年に対し、ヘルスケアの指導をするなど多忙で厳しい勤務であると述べていた。

帰国青年は、日本の社会保険制度や私立病院の治療・与薬システム、運営管理に興味を持っており、日本の大学病院での研修を希望していた。

## ③ Shaheed Suhrawardy Hospital

この病院は、外科、内科、形成外科、産婦人科、小児科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、歯科・口腔外科からなる375床の総合病院である。職員数は、医師が約100人、

看護婦が約90人、その他スタッフ約250人である。帰国青年の一人、シャミウル氏の上司であり、口腔外科医長のDr. Motiur Rahman Mollaより病院の概要、医療事情について説明を受けた。

訪問前日の外来患者数は、663人であった。Dhaka Medical College Hospitalと比較すると、この病院は収容人員に余裕があるが、全般的に患者が自己負担の少ない国立病院に集中する傾向がある。診療所を経由せず、まず患者が大病院にかかることが多く、病診連携は機能していない。国立病院に患者が集中する原因の一つには、地方に医師が少ないということもあげられる。

国立病院での診察費はアドミッションを20タカほど払うだけですむ。しかしながら、一部を除いて薬剤費と検査費用は全額患者負担となるため、貧困層は受診機会にめぐまれない。例えば、MRI、CTといった機械はない為、プライベートクリニックあるいは検査専門の株式会社で検査を受けなければならない。検査費用は、MRI(約一万タカ)、CT(四千タカ)ほどで、地方の労働者の月収が、三千タカ程度であることを考えると、とうてい支払える金額ではない。

昨今の医療費高騰の要因について尋ねてみたところ、検査にかかる税金と医師への報酬の上昇が主要因であるそうだ。医師への報酬は治療費とは別建てであり、自由価格であり、この部分がかかなり上昇しているという。

その後、口腔外科を中心に院内を案内していただいた。集患対策としての広告について訊ねてみたところ、医療広告にはガイドラインがあり、広告できる項目には制限があるそうだ。また、国立大学は広告自粛している。プライベートクリニックでも入り口に医師名や、診療科名を標榜している程度で日本の医療機関と表示内容に大差はない。

最後に院長のProf. Qazi Shahidul Alamと面会した。現在、病院拡張計画があり、将来的には建物を高層化して、放射線科を設置し、CTを導入し、義肢装具士を採用することを希望している。また、できることなら青年招へい事業に、スタッフを毎回送り出したいと考えている。

国立病院に勤務する医師の月給は一万タカと決して高くはない。帰国青年のシャミウル氏は、自分が国立病院に勤務するのは、一種の誇りを持っているからであり、慈善の心からでもあると語っていた。しかし、それだけでは生活が成り立たないので、国立病院での勤務が終わると、夕方からプライベートクリニックで診療している。バ国では金曜日と土曜日が休日であるが、医師は土曜日しか休日がなく、体が休まる暇がないと語っていた。

院内を案内してくれたMolla氏は広島大学で医学博士号を取得しており、日本への理解が深く、シャミウル氏が青年招へい事業により、自国とは異なる医療をめぐる環

境について学んできた事を高く評価している。そのため、Molla氏は今年6月に岐阜県の朝日医科大学で開催された口腔外科学会に出席するためシャミウル氏を同伴して再来日している。

シャミウル氏は、日本の医療従事者たちと意見交換することで、自国の抱えている臨床面での問題について再認識するとともに、医療提供体制、公的医療保険制度など、医療をめぐる日本の環境に興味深かったという。今後はさらに、口腔外科に関する基礎医学の研究を日本で行いたいと考えており、来年日本の医大への留学が内定している。

### (3) 交流会

#### ① 帰国青年主催交流会

この交流会は当初予定されていなかったが、帰国青年たちが是非自分達が主催して開催したいと企画してくれた。交流会会場はバ国の伝統的庭園をとり入れたレストランであった。庭園の池の中にある島には橋がかかっており、島にはテラスとベンチがあり、そこで帰国青年と語り合い記念撮影をした。降水量がとても多く、たび重なる洪水に悩まされるこの国であるが、水に親しんで暮らす心のゆとりを感じた。

会場に入るとすぐに、「またお会いできてうれしいです。」と日本語で書かれた大きな垂れ幕が目に入った。空港で出迎えてくれた時の垂れ幕とは別のものを作って用意してくれていたのだ。色とりどりの民族衣装をまとった女性たちと、スーツ姿の男性たち。彼らは皆、青年招へい事業参加の際に学んだ日本語をまだ覚えていて、日本語で話しかけてくれた。一年ぶりに会う彼らの笑顔は、日本で見せてくれた笑顔と少しも変わりなく、私たちが心から歓迎してくれている気持ちが伝わってくる。

席順にも細やかな心配りが感じられ、ホストファミリーと同席になるようセッティングしてあり、終始なごやかに進行した。歌手の弾き語りの後で、帰国青年の一人がステージに立ち、バ国の伝統的な歌を披露してくれた。この歌が非常に好評でアンコールに応じて何曲も歌ってくれた。それに応えて日本側参加者もパフォーマンス入りで日本の歌を歌った。帰国青年たちもみんなで一緒に歌ってくれて、会場は一つの輪になり、大いに盛り上がった。

勤務先が今回の訪問先に入っていない地方の帰国青年にとっては、交流会が唯一の再交流の場となったが、「もっと長く居て欲しい、今度は自分の町にも来て欲しい。」との言葉に胸が熱くなるのを覚えた。小さいけれども末永く続く、一人一人の小さな友情を通して、国と国の架け橋を作り上げていきたい。

② 同窓会・調査団共同主催交流会

帰国青年、JICA関係者、JICA同窓会、鳥根県国際交流青友会のメンバー、そしてアフターケア調査チームが集まり、とてもにぎやかな交流会となった。日本人は、バ国の民族衣装であるバンジャビ、サロワカミーズ、サリー、そして日本のユカタに身を包み参加した。

交流会では、帰国青年達はバ国の歌を披露してくれ、お返しとして鳥根県国際交流青友会のメンバーが日本の歌“もみじ”を歌いながら、日本の季節の移り変わりを寸劇で披露した。我々アフターケア調査チームは折り紙で鶴を折り、バ国側の参加者一人一人に感謝の気持ちを添えて手渡した。

その後は、写真撮影大会となり、交流会は終始にぎやかであった。我々は、別れを惜しみ、互いの発展と友情を誓い合って会場を後にした。私たちは、ここバ国で再会したことにより、一層友情を深めあうことができたと確信する。

個人と個人のつきあいが、お互いの国を思いやる気持ちに発展するのだと青年の1人が挨拶した。我々は彼の言葉に深く同意した。

(4) ホームステイ

| 氏名     | ホスト氏名                       | ホスト職業・参加年度・家族構成   |
|--------|-----------------------------|---|
| 新居 啓司  | Mr. Abdul Hanif             | (小児)外科医 (Dhaka Shishu Hospital)<br>平成 11 年度保健医療グループ<br>義父・義母・妻・息子・義弟  |
| 齊藤 かおり | Mr. Khandaker Ahmedul Haque | 外科医 (Tajgaon Thana Health Complex)<br>平成 11 年度保健医療グループ<br>兄・義姉・兄夫婦の息子 |
| 吉谷 秀氣  | Mr. Shamiul Alam            | 口腔外科医 (Shaheed Suhrawardy Hospital)<br>平成 11 年度保健医療グループ<br>従兄・従兄の娘    |
| 渡辺 悦子  | Mr. Zakia Akhter            | 国家公務員 (保健家族福祉省)<br>平成 11 年度保健医療グループ<br>夫                              |

青年が日本で実施されたプログラム中、一番期待が大きく、一番評価が高く、また一番不安を持ったのがホームステイであった。何故ならそれは、自分が体験したことのない異国の異なる文化や生活に直接身を置くことになるからだ。今回、私たちが逆の立場になることで、あらためてそう実感せざるを得なかった。

どのホームステイ先でも、家族、親族、友人がたくさん集まり私たちが歓迎し、夜遅くまで日本やバ国の話題で盛り上がった。

帰国青年たちは、日本でホストファミリーと一緒に過ごした思い出を、写真を見せながら懐かしそうに話してくれた。また、日本のホストファミリーとは今も手紙やEメールで連絡を取り合っているということであった。

ただ、残念なことに、数名の帰国青年から、こちらから手紙を出したのだけれど返事が来ない、ホストファミリーは元気なのだろうかと連絡のないホストファミリーに対して、安否を気遣う声が聞かれた。言葉の壁はあるであろうが、日本の家族を思う青年の気持ちにできる限り答えて欲しいと願う。

青年の言うとおり、ホームステイは文化・習慣が異なる相手を知る非常に良い、また相互の交流や友情を深める絶好の機会であることが分かった。

今回、このような温かい歓迎を受けたことで、帰国青年が日本で日本の家族と一緒に過ごしたホームステイが、彼らの言葉どおり本当に有意義なものであったのだと確信できた。

## 5. 所感および提言

### (1) 調査団所感

バ国に関する情報が少ない中、事前にある程度バ国について資料を仕入れ勉強してきたにもかかわらず、見ると聞くでは大違いで、毎日が事前情報の訂正と新情報の追加であった。

帰国青年たちは、多忙な業務の合間をぬって私たちのために時間を作り、本当に温かい歓迎でもてなしてくれた。また、バ国や自分の仕事、家族、青年招へい事業の持つ意義について熱心に語ってくれた。

帰国青年と話をする度に聞かれたのは、今度は受け入れに関わった日本人が是非バ国に来て我々を見て欲しいと、再交流を希望する声であった。

機会があれば日本で受け入れに関わった人は、是非、彼らの国を訪問して欲しいと思う。日本青年・ホストファミリーがバ国を訪問し彼らの国で再び交流できれば、一層の友情と信頼関係が築けるものと確信する。

このアフターケア調査も一過性のもので終わらせることなく、バ国を再考し、再交流の出発点となるきっかけとなるよう、また、今後の青年招へいプログラムの向上と事業に対する支持を広げるため、この調査結果を当該グループ受け入れに関わった日本の人々に広く提供するよう要望したい。

今回は、他分野グループの出席がなかったため、平成11年度保健医療グループを対象とした調査となったが、バ国の現状、青年の活動状況などある程度把握いただけたと



思う。これらを今後のバ国グループ受け入れに際してのプログラム策定にお役立ていただきたいと願う。

## (2) 団員所感

### ① 新居 啓司「バングラデシュを訪問して」

ジア国際空港到着ロビーの出口をくぐると、真正面の一等地に、たくさんの出迎え客をけん制しながら「バ国によろこそ」とぎこちない、けれど一生懸命な日本語で書かれた大垂れ幕が、たくさんの懐かしい顔と共に私たちを出迎えてくれた。いつも日本で迎える側に立ち、歓迎の垂れ幕を用意するのも機械的になり始めていた頃、彼らが忙しい仕事の合間をぬって作ってくれた垂れ幕と彼らの笑顔を見て、招へい青年が日本で各国語で書かれた歓迎のパナーを、各国の国旗を見て感動し、出迎えてくれた人々と垂れ幕と共に笑顔で写真に収まろうとする気持ちが、また、歓迎するとはどういうことなのか、この時初めて理解できた気がした。

ダッカ市内は、道路からはみ出してしまいそうなくらいのたくさんの車、ベビータクシー、リキシャ、そして人、人、人。「カオス」、「ごった煮」。交通秩序などほとんど存在しないように他人を押しつけそれぞれが自分の目的地を目指す。現地の旅行代理店が日本人観光客向けに作ったバ国観光案内パンフレットの中に見つけた、「国民総活気量世界一」というキャッチフレーズの妙に、正にそのとおりと調査団一同感心した。

青年たちの職場である病院では、彼らは皆、医師として現場の責任者として自信と誇りに満ちて働いていた。一方で、保健家族福祉省に所属している国家公務員でありながら、本業が終わった後も私立病院をいくつか掛け持ちしてアルバイトをしており帰宅が真夜中になることもしばしばだという。皆、バ国では地位も名誉もあり裕福な層に属すのだが、実際にはアルバイトをしないと今の生活水準を保てない状況である。

彼らを受け入れる前、バ国をよく知る知人から、午後は昼寝があるよと聞いていた。実際、招へいプログラム中、午後の視察先では居眠りする青年もよく見られ、やはり本当なのだと思った。最後の評価会で青年が「なぜ合宿セミナーに日本青年医師の参加が少ないのか」との質問に対し、私は「日本の医師は多忙である」と皮肉を込めて返答した。しかしながら事実は全く違っており、彼らは日本の医師以上に多忙であったのだ。実際に自分の目で見なければ現実には分からないことを改めて実感したと同時に、ステレオタイプであったと当時の自分を愚かしく思った。日本人として自らが持っている「常識」に照らし合わせて、何故あの時彼らがそうしたのか、何故あの時そうしなかったのか、当時は理解できなかったことが、今、こうして彼らが実際に

活している場や職場、街を見ることでやっと理解できたような気がする。

今回の調査で、バ国を様々な角度から見ることができ、プログラム・コーディネーターとして今後のプログラムの策定・運営に非常に有意義であったとともに、現地事前オリエンテーションにプログラム・コーディネーターも派遣されれば、より効果的なプログラム運営が可能であろうと思った。

ほとんどの帰国青年の家庭には、衛星放送を受信できるテレビセットがあり、日本のNHKも日常的に視聴できる環境にある。欧米諸国で研修した経験を持つ青年は多いが、それでも日本に対し尊敬とあこがれを持っているのは、日本とバ国が同じアジアの一員だからだという。

日本とバ国の末永い友好親善と、そして友人である彼らの、この国の発展を願って止まない。

## ② 齊藤 かおり「アフターケア調査チームに参加して」

今回、アフターケア調査チームに参加し、バングラデシュで青年達と1年ぶりに再会できた喜びや、青年の職場を回ることで医療の現状を知り得たことは、私にとって何事にも変えられない貴重な体験であったと思う。

1年前、都内プログラム合宿セミナーに参加し、そして今回アフターケア調査チームとしてバングラデシュに行く話を頂き、実際承諾しながらも彼らは私達の事を覚えているのかしら、という不安をもって訪問した。しかしその不安は、空港に着いた時点ですぐ消失した。なぜなら空港で彼らは「Welcome to Bangladesh」と書かれた大きな旗を持ち、一体どこの団体だろうと誰でも目に付くような歓迎をしてくれたことで、彼らの温かい気持ちが伝わったからだ。約1年という間で再会できたということはお互いにとって、ちょうどよかったと思う。

その後ダッカ市内に降り立ち、まずは人の多さと空気の悪さに驚いた。道路には車、バス、ミニバイク、リキシャと人でごった返し、交通ルールなどという言葉は当てはまらない。逆に彼らが日本に来た時に、交通規則を守っていることに驚いたのも無理はないと実感した。また、排気ガスによる大気汚染で、街中に霞がかかり、木の葉は茶色にくすみ、触れば指の模様が出来るような具合だ。そのような環境で抱えている様々な問題は、青年達の話や職場を回ったりすることで浮き彫りにされた。それは、バングラデシュに根付く、宗教・国民性・女性の地位などが影響し、それが今日のバングラデシュを作り上げている現状である。

実際の職場の様子や保健医療分野の現状に関しては、それぞれの個所で述べているので省略するが、この1週間と言う短い間で青年達の好意により色々な病院・施設に訪問できたことは、看護婦として保健医療に関わっている私としては大変興味深く、

貴重な体験ができた嬉しく思っている。ただ、スケジュール的に1日に3～4つの施設を回ることになると必然的に忙しくハードになり、つい日本にいる看護婦としての自分になり、廊下を走り出そうとする様子を注意されることもあった。確かにバングラデシュの人で走っている人を見かけることは少なく、クリケットをする人ぐらいだろうか。それでも、異文化の中で体調も崩さず、毎日充実した日々を過ごし、無事全行程を送れたことは良かったと思う。

時間も限られたことから今回はダッカ市および郊外だけの訪問となったが、欲を言えば地方の村にも回り、実際の保健衛生を見ることができたなら、もっとバングラデシュ全体の現状が得られたのではないかと思った。しかし今回は青年職場訪問が主であり、よって医者が地方にはいなく、ダッカ市に集まっていると言う故なのだろうか。

いずれにしろ、今回のアフターケア調査により帰国青年との再交流を、私達は心から喜び、バングラデシュの現状を知り得たことで、お互いをもっと深く理解できたことを確信する。そして、それはこの先も続く友情の絆をさらに強いものにできたと思う。このような交流をもって相互の協力関係の促進を図り、今後のバングラデシュの発展や国際交流の促進につなげるためにも本事業が推進することを願っている。

### ③ 吉谷 秀氣「アフターケア調査をとおして」

ジア空港到着の日、期待に胸をふくらませてバ国の大地を踏みしめた私達を、帰国青年たちは歓迎の垂れ幕を作って出迎えてくれた。思いがけない彼らの歓待に感激した。忙しい仕事の合間をぬって準備をし、平日にも関わらず時間をつくって空港まで来てくれた彼らの好意は何物にも変えがたい。

今回のアフターケア調査で再会した帰国青年たちは、ホームステイと合宿セミナーが一番の思い出だと口にしていたが、私もそれを実感した。ホームステイでは、ホストのシャミウル氏が一人暮らしであったため、親戚の家に泊めてもらうことになった。奥さんは留学中だったものの、親戚の方が集まってきてとてもにぎやかだった。

シャミウル氏は、私の家族一人一人の身を心配してくれ、自分の家族の近況を話してくれた。ベンガル人は家族を大事にする気持ちが強い。そして、その家族と同様に大切にしてくれた彼らのもてなしの心を、私は決して忘れることができない。

この家の主人も医師であり、この日は自身が経営するプライベートクリニックで手術が3件重なり、帰宅は午前零時を過ぎていたにも関わらず、私をドライブに連れていってくれた。ライトアップされた美しい建築物の数々は昼間とはまた違った趣を呈していた。

翌日、シャミウル氏がボンゴ・ボンドウ博物館を案内してくれた。ここは1975年

に暗殺された建国の父シェイク・ムジブル・ラフマンの自宅を博物館に改造している。熱心に独立時のバ国の様子を日本との関わりも交えて解説する姿に、自国への愛情や誇りを強く感じた。独立して30年足らずの若い国バ国を、自分達が発展させていきたいという熱意が伝わってくる。青年招へい事業で見せてくれた、異国の地で何かを懸命に学び取ろうとする姿勢もその一つの現れであろう。

医療資源も従事する人材も不足している中で、帰国青年たちは懸命に眼前の問題に取り組んでいた。バ国では、医療を受ける機会が少ない人も多い。しかしながら、地方で公的医療保険が試験的に実施されはじめたのは光明である。近い将来、この仕組みがバ国全土に広がり、国民があまねく医療を受けられるようになることを切に願う。

国立病院には患者があふれている一方、設備の良い私立病院では裕福な層だけが受診できる現状で、一つの例外的な病院が印象に残った。帰国青年の一人ザヒッド氏が、ショートトリップの帰り道に以前勤務していた病院を訪問させてくれたのだが、この病院は日本からの援助も入っていて、施設は今回訪れた医療機関の中で最高であった。しかし、患者層を見たところ決して裕福な者だけの病院ではない。また、充実した図書館もあり、病院関係者以外の者にも開放しており、広く医療従事者の教育を重視していることがうかがえる。

彼と一緒に院内を案内してくれた看護婦は日本への留学経験がある。彼女も含めてこの病院では看護婦の地位が高く、皆自信に満ち溢れて仕事をしており、医師に対しても堂々と自分の意見を述べていた。施設面でも恵まれていて、看護婦専用のカンファレンスルームが多数用意されていた。看護婦のエンパワーメントに日本への派遣が功を奏していると言える。青年招へい事業でも、失踪の問題を解消して、パラメディカルの派遣再開が待ち望まれる。

今回のアフターケア調査では、限られた時間の中で数多くの職場を訪問していくため、彼らと共有した時間はとても短いものであった。しかしながら、行く先々でのあたたかいもてなしとあふれる笑顔に、お互いに通い合った心と心の結びつきの深さを実感した。これはその国の表面をなぞるような研修スタイルでは決して得られない。私は帰国青年たちの言動一つ一つから、様々な友情という目に見えない絆を感じた。やはり合宿セミナーで共に学び、寝食を共にして培った深い友情は、一過性のものではないことを再確認した。帰国青年の数名とは、Eメールや手紙でのやりとりを続けており、これからも彼らとの心の交流は続いていくだろう。そして、共に手を取りあって、両国の明るい未来を築き上げていきたい。

#### ④ 渡辺 悦子「バングラデシュとの関わりについて思うこと」

現在私は、YMCAバングラデシュに加わり、この国の医療状況文化を学んでいる。バ国に滞在し、約3ヶ月が経過した。従って、今回アフターケア調査チームに加わったことは、自分自身とバ国を見つめ直す良い機会となった。著しい経済発展をとげた日本と多くの経済・社会問題を抱えるバ国。2つの異なる国の青年が、友情を築くのになんらの条件も要らないというのが私の考え方だ。互いの文化を尊重し学び合うというのが、発展的ではないだろうか。

来日した青年は、日本で様々なことを学び、それを職場に戻って報告する機会を得ていた。そのような学びを短期に反映させることはできなくても自国以外の状況を知るといのは大きなメリットになるはずだ。

来日前の不安としては、食事内容、安全面、物価が気になったそうだが、私自身もバ国に来る前、同じようなことが気になった。印象的であったのは、多くの青年達が日本で様々な異文化にぶつかっても楽しみながら乗り越えたと言ってくれたことである。「外を知ることで内が見える。」という言葉がある。アフターケア調査チームの我々も、バ国を知ることで改めて日本を振り返ることができた。バ国青年も日本を知ること自国を振り返り、問題を克服しようという意欲が感じられた。

私の目には一人一人の青年が自分の仕事に誇りを持ち、日々努力しているように映った。青年の職場訪問先では、日本の援助で購入した医療機器が紹介される場面もあった。彼らが今後も日本の援助を期待していることは否めない。しかし、私はバ国の人々が自助自決の精神をもって、己の国を維持していく日が来ることを祈っている。バ国は確かに貧しい国である。しかし、貧しさ=不幸ではないと信じたい。

バ国人は、日本人とは異なる独得のたくましさがある。生きること、生活すること、お金を稼ぐことに対してのたくましさだ。帰国青年達にも、独得のたくましさがある。彼らの瞳は好奇心に溢れている。そして一番嬉しかったのが、彼らが我々に対して、いつでも友好的な態度をとってくれたことである。

口々に青年は「日本が大好きだ。」と言ってくれた。私たちの友情は今後も続くと信じたい。日本とバ国は遠いけれど、私たちは友情という絆で結ばれている。私は2001年2月までバ国に滞在するが、今回の経験を生かしてさらにこの国に混ぜてもらおうと思っているところだ。

### (3) 提言

#### 問題点

- ① 招へい青年の出身地の偏り
- ② 招へい青年の視察に対する不満足

- ③ 合宿セミナー参加日本青年の職種の偏り
- ④ 日本青年のバ国に対する知識不足

#### 問題点の原因又は理由

- ① 失踪問題を解決するため、身分保障があり、プログラム実施に十分な英語力を持つ参加者候補を選ぶとすれば、どうしても保健家族福祉省に配属されている首都在住の先進国への渡航・留学経験のある裕福な医師もしくは行政官ということになってしまう。
- ② 事前の説明不足のためか、プログラムの目的が来日前に十分に理解できていない。医療グループに関していえば、一人一人の専門性が非常に高く、医療機関の視察においては、例えば、外科医の場合、手術室でオペを見学したい等、実際に医療が行われている現場に入ってみたいという過度の期待を抱いて来日しているため、期待どおりの視察ができないと分かると「デイズニーランドを視察先にして欲しい」など観光的要素が強くなってしまう。因みに、今回の調査では、病院訪問の際、オペを実際に手術室に入り見学することができた。
- ③ 日本青年参加者のほとんどは、医師以外の医療職である。病院の中で最も多忙である20～30代の日本青年医師の合宿セミナー参加は非常に難しいのが現状である。招へい青年の職種の割合に対して釣り合いが取れておらず、結果、ディスカッションにおいては物足りないものになってしまった感がある。
- ④ 合宿セミナー参加にあたり、事前にバ国の一般および医療事情についての資料、情報源等を提供し、当該国について各自で勉強するよう指示しているが、医療職の多忙さゆえ、事前に十分な学習ができていないようである。また、合宿セミナー事前オリエンテーションにも、できるだけ参加するよう呼びかけているが、仕事の都合等で半数程度の参加に留まっている。

#### 改善のための具体的方策

- ① 地方から参加者を得るためには、バ国当局と協力して、保健家族福祉省(担当省庁)の責任者の同行を要請したり、日本でのプログラムをベンガル語で実施したりする工夫が必要であろう。
- ② 来日前の事前オリエンテーションを充実させ、日本でできることとできないことを

明確にし、なぜできないのか理由を明確にしておくこと、また、プログラムのめざすものが何であるか事前に十分に理解させておく必要がある。事前オリエンテーションの説明は、可能であれば、青年招へい事業の同分野に参加した帰国青年によって行われるべきだ。参加人数等の問題もたくさんあるだろうが、実験的に、事業の目的をよく理解し、視察・交流ともバランスよくこなしているアセアン混成グループにバ国を加えてみてはどうだろうか。

- ③ 仮に今後も医師主体のグループ編成で招へいが続くようであれば、日本の医師個人、病院等の団体に対しホームページ、医療関連メーリングリスト等を活用し、より積極的な広報を行わなければならない。実際に一般公募すると、参加を希望する日本青年の職種のひとつが、医師以外の医療職となるので、招へい青年の職種も日本青年の職種割合に可能な限り合わせ、医師：医師以外の医療職＝1：5程度の割合で招へいしてはどうだろうか。
- ④ 合宿セミナー事前オリエンテーション参加を義務づけ、バ国の一般および専門分野事情の資料配布、当該国をよく知るJICA関係者等による講義をとおし、日本青年参加者に事前学習を周知徹底させる。

# タイ王国

平成13年1月11日～17日

日本青年団協議会





## I. 調査目的

### 1. 調査目的

- ・ 帰国青年との再交流を通じ、日本での研修成果のフォローアップと日本理解の増進を図る。
- ・ 日本側のカウンターパートと帰国青年との再交流を通じ、本事業を相互の青年交流へと発展させる。
- ・ 帰国青年同窓会との交流を通じて、相互の協力関係の増進を図る。
- ・ 青年の所属先関係者に対し、事業の理解の促進と青年への支援を働きかける。
- ・ 関係者との意見交換や相手国事情の理解を通じ、今後のプログラム改善に寄与する。

### 2. 調査内容

#### (1) 国際協力事業団タイ事務所

- ・ タイ国の一般事情、JICA の活動状況及び青年招へい事業運営状況概説

#### (2) 在タイ日本大使館

- ・ タイ国の一般事情

#### (3) タイ国青少年局 (National Youth Bureau)

- ・ 青年招へい事業に対する考え方及び青年の募集及び派遣などの状況

#### (4) タイ国帰国青年連絡組織 (The Friendship Youth Alumni Association of Thailand)

- ・ 組織活動状況及び青年招へい事業に関する意見交換と要望事項の聴き取り

#### (5) 帰国青年活動現場 (職場)

- ・ 帰国青年が滞日経験をどのように職場で活かしているか。

#### (6) 帰国青年との交流会

- ・ 青年の持つ対日イメージや感情が、どのようなものであるかを体感するとともに、それらがより深く正確なものとなるよう促進する。

### 3. 調査団員

|      | 氏名    | 所属先            | 青年招へい事業との関わり  |
|------|-------|----------------|---------------|
| リーダー | 山本 信也 | (財)日本青年館 事業部   | 分野別都内プログラム担当者 |
| メンバー | 武市 昌之 | (財)岡山県青年館 常務   | 分野別地方プログラム担当者 |
| メンバー | 一藁 智  | 同 国際交流担当       | 同上            |
| メンバー | 千葉まり子 | (財)全日本剣道連盟 事業部 | 共通プログラムでの演武   |

## II. 調査結果

### 1. 日程

1月11日(木)

- 10:30 成田発 TG641 便(山本、千葉)
- 11:10 関空発 TG623 便(武市、一藁)
- 15:30 バンコク着(両便とも)
- 17:00 ル・メリディアン・プレジデントホテルチェックイン

1月12日(金)

- 08:45 ホテル発
- 09:30 JICA タイ事務所訪問・打ち合わせ
- 10:30 日本大使館表敬訪問
- 12:00 昼食
- 14:00 タイ青少年局(NYB: National Youth Bureau)表敬訪問
- 16:10 Alumni Association 帰国青年同窓会との意見交換
- 18:30 ホテル着

1月13日(土)

- 08:30 ホテル発
- 10:00 帰国青年職場訪問と聞き取り調査
- 終日 Mr. Sakchai Kitchai (1997年農業グループ)  
Samut Sakhon (サムットサコーン) 県で農業を営む  
ラン栽培、魚の養殖、酪農経営
- Mr. Jumrus Kostchasila (1998年農業グループ)  
農業省畜産局サムットサコーン地区事務所
- 18:00 ホテル着

1月14日(日)

- 08:00 ホテル発
- 09:20 バンコク発 TG104 便 チェンマイへ
- 10:30 チェンマイ着
- 11:20 ロイヤル・プリンセスホテルチェックイン
- 午後 Ms. Sujin Saritnum (チェンマイ帰国青年同窓会委員) 自宅訪問  
Maesa Elephant Camp 視察
- 20:00 ホテル着

1月15日(月)

- 08:45 ホテル発
- 09:30 帰国青年職場訪問と聞き取り調査  
タイ研究基金北部事務所(The Thailand Research Fund Northern Regional Office)  
Ms. Arpa Maneerat (1998年農業グループ)  
地域開発プロジェクトを展開  
Mr. Piyawat Boon-long (同所長代行) 同席
- 13:15 タイ山岳民族教育文化協会(The Inter Mountain People Education and Culture  
in Thailand Association : IMPECT)  
Mr. Waiying Thongbue (1999年農業グループ)  
連絡調整員
- 19:00 帰国青年との交流会
- 21:00 ホテル着

1月16日(火)

- 09:00 ホテル発
- 10:15 チェンマイ発 TG106 便 バンコクへ移動
- 11:25 バンコク着
- 14:00 帰国青年職場訪問と聞き取り調査  
Kasetsart University (カセサート大学)  
Ms. Phunsup Seubma (1998年農業グループ)  
農学部園芸学科で花卉栽培を教えている。
- 19:00 交流夕食会
- 21:00 ホテル着

1月17日(水)

07:00 ホテル発

09:10 バンコク発 JL728 便 16:15 関空着

11:20 バンコク発 TG640 便 19:00 成田着

## 2. 主要面談者

### (1) JICA タイ事務所

所長 森本 勝

所員 岩井 淳武

同 Ms. Rungsinee Chaiyakoon (帰国青年)

### (2) 在タイ日本大使館

一等書記官 奥村 英輝

### (3) タイ青少年局 (NYB : National Youth Bureau)

次長 Ms. Srinoi Kasemsanta (Deputy Secretary General)

職員 Ms. Sunee Srisangatrakullert (External Relations Officer)

同 Ms. Uyanee Kangwanjit ほか

### (4) 帰国青年同窓会 (Alumni Association)

会長 Mr. Decha Sigvanich (President)

委員 Mr. Surapol Pitucklimskul (Committee)

同 Ms. Siriwan Sakornruksa (Committee)

同 Ms. Muukda Jenthanyawan (Committee)

同 Ms. Vilawan Kheawaomboon (Committee)

### (5) 帰国青年活動現場

#### ① Samut Sakhon (サムットサコーン) 県の農場

Mr. Sakchai Kitchai (1997年農業グループ) 農場経営者

Mr. Jumrus Kostchasila (1998年農業グループ)

農業省畜産局サムットサコーン地区事務所勤務

(Animal Husbandary-Samutsakhon Province Livestock Office)

- ② チェンマイ市内で土産物製造販売  
Ms. Sujin Saritnum (チェンマイ帰国青年同窓会委員)
- ③ タイ研究基金北部事務所  
(The Thailand Research Fund Northern Regional Office)  
所長代行 Mr. Piyawat Boon-long (Deputy Director)  
研究者 Ms. Arpa Maneerat (1998年農業グループ) (Program Officer)
- ④ タイ山岳民族教育文化協会  
(The Inter Mountain People Education and Culture in Thailand Association : IMPECT)  
連絡調整員 Mr. Waiying Thongbue (1999年農業グループ)
- ⑤ カセサート大学 (Kasetsart University) 農学部園芸学科  
教授 Ms. Phunsup Seubma (1998年農業グループ) (Teacher)

(6) 帰国青年との交流会

- ① チェンマイ  
Mr. Ampol Warittitham (1998年農業グループ)  
Mr. Waiying Thongbue (1999年農業グループ)  
Mr. Sanya Lekpaijitr (2000年)  
Ms. Wannakanok Tiyaworaboon (2000年)  
Ms. Kitiya Chitmunchaitham (2000年)  
Ms. Geneva Pooriwarangkakul (2000年)  
Mr. Vichuladn Natanboon (2000年)
- ② バンコク  
JICA 岩井 淳武  
同 Ms. Rungsinee Chaiyakoon  
帰国青年  
Mr. Thawewai Surasit (1998年農業グループ)  
Ms. Ubonrat Wiriyakul (1998年農業グループ)  
Mr. Suppawad Kaewkhaw (1998年農業グループ)  
Ms. Saowapa Ketnoi (1999年農業グループ)  
Mr. Poorun Prayotudomkit (1999年農業グループ)

Mr. Jumrus Kostchasila (1999年農業グループ)

帰国青年同窓会

会長 Mr. Decha Sigvanich

委員 Mr. Surapol Pitucklimskul

同 Ms. Siriwan Sakornruksa

同 Ms. Muukda Jenthanyawan

同 Ms. Vilawan Kheawaomboon ほか2名

### 3. 調査結果概要

前記の調査目的を達成するために大きく分けて4つのプログラムを実施した。メインは、帰国青年4人の職場訪問で、次いで同窓会・NYBとの会談、そして2カ所での交流会等である。スケジュールが過密だったにもかかわらず有能な通訳のおかげでじっくりと密度の濃い意見交換の場を持つことが出来た。

今回のプログラムを通じて、青年招へい事業の成果を実感することが出来たほか、ほんの一部だがタイの現状を垣間見ることも出来、さらにタイ青年のものの考え方やタイの抱える問題点も理解することが出来た。合わせて本事業を展開するにあたって改善すべき点も明らかになるなど、大きな成果を得ることができた。

### 4. 現地調査・活動内容結果

#### (1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

##### ① JICA タイ事務所

30年ぶりにタイに赴任したという森本勝利所長が、多忙な合間を縫って我々を迎えてくれた。所長は当時の様子と比べながら現在の状況を具体的な数字を上げながら説明して下さった。特に印象に残ったことは、所長をはじめ多くの関係者のご努力で日タイの絆が大変強いものとなっていることで、毎年およそ100億円の援助がなされており、青年海外協力隊員は約50名、シニア隊員が40名、そして150人もの専門家が活動しているということであった。協力隊の職種では、日本語教師や養護隊員が増加中とのことである。

また、青年招へい事業で毎年150人が来日し、帰国後は同窓会がしっかりしており、支部活動までが展開されているとのことで、この事業がタイの中できちんと位置づけられているとの認識を持つことが出来た。

##### ② 在タイ日本大使館

奥村英輝・一等書記官が労働省出身ということもあり、経済や労働そして教育の現

状などの面からタイの現状について詳しくお話ししていただいた。タイには3万人弱の日系人が生活しており、観光や仕事などの短期滞在者を含めると常時5～6万人がいるという。日本バンコク商工会議所には1200社もの企業が加盟するなど人的な交流の規模は世界でも最大規模だという。そのために、大使館のアテンド業務は各国にある大使館の中では最も多いとのこと。

青年招へい事業には、大使館として事前プログラムに参加している。選考や派遣業務もうまく運営されており、帰国後の同窓会もうまく機能していると聞いている。タイ政府もこうした人的交流を非常に重視している。しかし、分野が多岐にわたることから統一した評価がなされていないのが現状で、アフターケアなども含めトータル的に考える必要があるとのことであった。

### ③ タイ青少年局 (NYB : National Youth Bureau)

青年招へい事業のタイ側の窓口となって実際に広報・募集・選考・派遣・帰国後のケアまで携わっている Ms.Sirinoi 局長はじめ4人のスタッフからこの事業の位置づけや選考方法などについて興味深い話を聞くことが出来た。

NYBではこの事業を人的な交流を重視する「友情計画」と位置づけ、派遣する青年には「日本で広範囲に知識を得ること、また派遣団の中で幅広い交友関係を持つこと」の大切さを力説している。

タイ側のこの事業に関する一連の流れを追ってみると、まずJICAとの協議によって職業別グループが決定され、それを受けて選考委員会で選考の詳細が決定される。例えば、経済グループの場合には商務省、農業グループの場合には農業組合省というように窓口が決められる。民間から派遣してもらう場合は、財団や民間企業に依頼している。しかし、いずれの場合も公募という形をとり、新聞やテレビ、ラジオ等で募集している。毎年150人ほどの募集に対し、1500人ほどの応募がある。応募の条件は三つで、・18～35才であること・グループに適した職、あるいは関係機関に務めていること・タイ国籍を持っていること等である。

選考は、書類選考、面接、タイ語、一般常識の試験を用意している。アセアン混成の場合はこれに英語が重視される。面接試験では5～6人ごとのグループ面接を実施し、本人のこの事業に対する意欲を見るようにしている。面接は現在はバンコクで実施しているが、将来的には地方で実施することも考えている。

帰国した翌日には最終評価会をNYBで持ち、レポートの提出、アンケートへの回答をしていただいている。帰国後は全員が同窓会のメンバーになることを義務づけている。この同窓会にはNYBが支援することもあり、また逆にNYBが招待した海外の青少年団体のお世話をさせていただくこともあるとのことであった。



#### ④ 帰国青年同窓会 (Alumni Association)

会長のMr. Dechaはじめ5名の委員会メンバーとJICA事務所で懇談し、同窓会の活動内容などについて理解することが出来た。

同窓会の目的は同窓生同士の交流及びJICA事業の理解を促すことの2点で、帰国青年の約1200人が登録している。うち実際に活動しているのは200人程度。具体的な活動としては、年1回の総会、ニュースレターの発行のほか、貧しい子どもたちのケアや象の保護、森林の保全などにも取り組んでいる。都市部よりも地方にいる人の方が活発に活動している。会費は終身会費として20バーツ徴収していたが、最近はそのをやめて、活動資金はもっぱらJICAやNYBなどに頼っている。委員会の役員は7名で、会長の他、書記、会計、広報などの役割を分担している。任期は2年。最近ではチェンマイにも支部が出来、イサンや南部の方にも支部を作りたいとしている。

仲間を拡大し、組織を強くするために訪日前の青年たちに強くアピールしたいと考えているが、現状ではNYBが同窓会の説明時間を1時間用意してくれるだけ。選考の段階にも加わりたいが断られている状況である。

### (2) 帰国青年活動状況

#### ① Samut Sakhon (サムットサコーン) 県の農場

Mr. Sakchai Kitchai (1997年農業グループ) 農場経営者

サムットサコーン県はバンコクの西南に隣接し、チャオプラヤ川の支流が網の目のように流れる肥沃な土地である。このような地域でMr. Sakchaiは、ラン栽培、酪農、魚の養殖に取り組んでいる。彼は訪日時に沼津の酪農家にホームステイし、しかも近くのラン農家を訪ねることが出来た。その時に学んだことは、とにかく品質管理に力を入れることであった。農業視察での学びはタイでも応用がきき、自分自身の意識改革につながっていったとのことで、その後の彼の農業経営に大きな影響を与えている。

ラン栽培においても酪農においても無農薬・有機栽培を基本としながら高品質のものを生産することに努め、さらに魚の養殖においても公害を出さない自然にやさしい事業にしようと、化学薬品やホルモン剤などは一切使わずにやっている。

本事業の成果を目のあたりにすることが出来た。

#### ② タイ研究基金北部事務所

(The Thailand Research Fund Northern Regional Office)

研究者 Ms. Arpa Maneerat (1998年農業グループ) (Program Officer)

来日当時は大学院生だったMs. Arpaは、卒業後おなじチェンマイ大学のキャンパス

の中にあるタイ研究基金北部事務所に入った。この研究所の目的は、村人たちが日常生活で問題に出会ったときに自分たちで解決できるように指導することで、具体的には、問題解決能力をつけること、そしてよりよい生活のための技術を各自の能力に応じて身につけ、実施できるようにすることである。研究所では現在約100のプロジェクトに取り組んでいるが、彼女は3人しかいないマネージャーの一人として土曜返上で地域に入り込んでいる。村落開発では、様々な地域特性の中で多くの知識を求められるが、日本での視察やホームステイで学んだことが、仕事の仕方や小さなことまで役に立つことが分かったと語ってくれた。特に、農協のシステムと青年団のことが非常に勉強になったという。

③ タイ山岳民族教育文化協会

(The Inter Mountain People Education and Culture in Thailand Association : IMPECT)

連絡調整員 Mr. Waiying Thongbue (1999年農業グループ)

IMPECTは、山岳民族関係の初めての村落開発NGOで、8年くらい前に正式な組織となってスタートした。その目的は、山岳民族の自立にある。ユニセフや日本などから資金援助を受け、現在では32名のスタッフがいる。そのスタッフもタイ人は一人、タイ人と山岳民族の混血が一人、あとは全員が山岳民族である。Mr. Waiyingもカレン族の一人で、奨学金をもらって大学に行った恩返しの意味も含めてこの活動に加わっている。活動は、そこに住む人々の主体性を重視することをベースに置いて取り組まれている。

彼が来日して最も嬉しかったことは、日本人の多くが山岳民族に興味関心を持っていてくれたことであった。そのような人々と友達になり、また彼らが訪ねてくれることにより世界が広がっていったことが最大の成果であり、友情の構築という目的は達成することが出来たと思う。彼は、社会開発に興味を持っているので岡山県の実直村にホームステイすることが出来、そこで行政が公平に行われていることを理解することが出来た。また、広島の実直資料館で映画「母たちの祈り」を見たが、皆で泣いて認識を新たにした。いいプログラムだった。次回、もし日本に行くことがあったら福岡正信先生の自然農法を学びたい、と語ってくれた。

④ カセサート大学 (Kasetsart University) 農学部園芸学科

教授 Ms. Phunsup Seubma (1998年農業グループ) (Teacher)

花卉の栽培を教えているMs. Phunsupは、自分が使っている教材用のスライドを見せてくれた。それは彼女が来日した際に撮影したもので、そのスライドから自分が日本でどんなことを学んだかわかりやすく説明してくれた。例えば、町中の花屋に熱帯

の木が売られている写真を紹介し、生徒たちに市場は大きいことを教えたり、地下鉄の駅やトイレの中にまで木が植えられている写真で、植物はやすらぎとやさしさを与えてくれるもので大切にしなければならない、という具合であった。いずれにしても、我々が普段何気なく見ているところに彼女の目は留まり、一つひとつに感動したそうである。また、音楽を聴かせながら農産物を育てたり、農家の周囲にゴミがほとんどなく、有機栽培に取り組む姿に、いいものを効率的に作ろうとする姿勢を学んだ。また、多くのハイテク技術も学んだが、我が国の国情にあわせて生徒に指導している。日本にいたる間は感動の連続であった。限られた時間の中で、一分一秒を大切にしたい。チームワークの取れていたグループだったので、帰国後も仲良く交流し仕事にも活かしている。もし、再訪の機会があったら技術を直接見られるような農場や機関でじっくり学びたい、と語ってくれた。

### (3) 交流会

チェンマイとバンコクで交流会を持った。チェンマイでは地元の民族舞踊を見たり踊ったりしながらの交流で、バンコクでは中華料理を着に大いに旧交を温めあった。いずれにしても、彼らの日本に対する愛着に強いものを感じ、互いに訪日時の思い出を語り合ったり、帰国後の活動状況を熱っぽく交換する姿はこの事業の成功を物語るものであろう。

## 5. 所感および提言

### (1) 調査団所感

わずか一週間の訪問であったが、4人の帰国青年の職場訪問並びに同窓会メンバーやNYBスタッフとの会談、そしてチェンマイとバンコクの2回の交流会は非常に有意義なものであった。準備・手配していただいたJICAのみなさんに心から感謝申しあげたい。

とりわけ4人の帰国青年の職場訪問は印象深いものであった。いずれも農業グループで来日しており、うち3人は私どもが受け入れを担当した青年であったので、懐かしさはひとしおであった。彼らはいずれもかなり高い倍率の選考試験をクリアしただけあって非常に優秀で、日本での学びもきちんと自分のものにして職場の中に活かしているようであった。帰国後も、日本人との通信や往来の関係も続いており、友情は着実に育まれていると感じられた。

また一方、来日したグループの中での交流も彼らにとっては大きなメリットになったようで、帰国後も情報交換や互いの往来を通じて仕事に活かし合っているようである。同窓会がもう少し機能してネットワークを広げてくれると、この点はさらに充実してくるのではないかと思われる。

青年たちを募集・選考し、送り出してくれているタイNYBのスタッフの方々はこの事業を「友情計画」と捉え、非常に高い評価をしている。広報から募集、選考に至るまで工夫を重ねられている。帰国青年たちに聞いてみると、筆記試験・面接試験ともに問題はかなり専門的であったという。

同窓会の活動もかなり活発に行われているとの印象を持ったが、帰国青年たちに同窓会への参画状況を聞いてみると一部のグループにその活動が偏っているとの話もあり、同窓会運営の難しさも垣間見ることが出来た。

## (2) 団員所感

### ① 山本 信也「ヌイさんのこと」

チェンマイ大学の広大な敷地の中にTRF(The Thailand Research Fund Northern Regional Office)を訪ねた。あまりの広さにさんざん迷った末の到着であったが、98年農業グループの一員として来日したMs. Arpa Maneerat(ヌイさん)と所長代行のMr. Piyawat Boon-long氏が暖かく迎えてくれた。ヌイさんは、日本から帰国後大学院を卒業し、ここTRFのマネージャーとして村落開発に携わっている。3時間に及ぶ懇談を通じて2つのことが強く印象に残ったので報告したい。一つ目はヌイさんの仕事のこと、今一つは本事業の選考プロセスである。

### TRF(タイ研究基金)とは

TRFは政府予算で運営されている地域振興を支援する研究機関で、本部をバンコクに置き、ここチェンマイ大学の中に北部地域事務所がある。政府機関の求めに応じて調査研究を実施することもあるが、主にタイ北部地域一帯の調査研究にあたりと共に、地域開発プロジェクトを展開している。

研究所の職員は10名で、マネージャーはヌイさんを含めて3名。現在、北部地域事務所では100プロジェクトを展開している。1プロジェクトは、生徒20名、長老や先生などからなり、地域開発に携わる職員は現場に入り込んで研究・指導し、その地域全体をマネジメントしている。

村落開発の主な調査研究テーマは、①観光誘致 ②青少年活動 ③薬草栽培 ④行政指導(民主制) ⑤婦人指導(野菜栽培や手工芸) ⑥山岳民族の指導などである。いづれにしても、ハイテクによるのではなく環境にやさしい農業の指導と、学校の生徒に対しては自然と調和した生き方の指導をしている。

### ヌイさんのこと

ヌイさんはチェンマイ大学大学院で村落開発を研究している。机上の研究だけでな

く地域を実践するのが好きで、可能な技術を駆使して環境と人間が両立していける生活を作りあげることが私の生きがいと語るだけに、この研究所にはいることができて本当に幸せそうであった。

ヌイさんの研究プロジェクトは、チェンマイの南約30kmのランプーン地区にある小さな町で展開されている。この町は1400年くらいの歴史を持つ、仏教の中では重要な地位を占める所とのこと。若者の流出を食い止めようと日系企業を含む工場を誘致しているが、流出に歯止めはかからない。しかし、この町は優れた民芸品を産出している。木や竹、ホテイアオイなどの繊維を上手にほぐして籠やバッグを作っているのである。その技術を活かそうと、小学校では教科の中で手工芸品の技術を教えるなど技術の保存・伝承に努めており、中・高校になると、養殖や養鶏の技術や経営まで教えている。直接に農業ではなく、外堀を攻めていく形を取っているため、家や学校だけでなくお寺との協力が大切だとも語る。

さらに、エコツアーやバードウォッチングなどで、村人がきちんと説明できるように指導したり、観光農園の造成や織物、お菓子の製造・販売なども手がけている。いずれもフランス、ドイツ、中国などから助成を受けて実施しているものだ。

こうした活動に来日時の学びが大いに役立っているという。とりわけ、青年団の活動と農協の組織や流通形態がそうだとのこと。TRFでも青少年を麻薬から守るプロジェクトを20ほど展開しているが、青年団のように青少年に近い世代がボランティアとして子どもたちと一緒に生活したり相談にのるなど、地域ぐるみで子どもたちを育てている姿は参考になったようである。また、農産物や手工芸品などはいくら生産しても流通に載せないと意味がない。農協のシステムはそのまますぐには導入できないが、勉強になったとのことであった。

#### 訪日にあたって

そうしたヌイさんがこの事業に参加したのは、大学の掲示板で21世紀の友情計画の案内を見たのがきっかけであった。大学の先生が偶然この事業への参加青年だったこともあり、先生からも強く薦められ応募した。

選考試験はバンコクで行われ、面接と筆記試験があった。応募者は1000人以上にものほり、そのうち100人が面接と筆記試験を受け、最終的に23人が選出された。

面接試験は、面接官5人に対し受験生が3人という割合で行われた。尋ねられたことは、まず全員に対して

- a. 自己紹介
- b. 農業のことについて何でも話すように
- c. 日本の印象を述べるように、というものであった。

その後、個別に質問されたことは以下の点である。

- a. 青少年の能力や力を高めるために、どのような教育や活動をすべきか
- b. タイ農業の現状を述べ、日本で何を吸収し、どのように役立て寄与したいのか。

一方、筆記試験は45分間で、その問題は

- a. 現行の青少年に対する法律は、青少年を健やかに育てるのに理にかなっているか。また、教育制度はどうか。
- b. 現在の農業政策で、農業を効率よく発展させるためにはどうすればいいのか。また、自分が行政官だったらどうするか。

今回の募集のテーマが「農業と青少年」だったので、出題される内容についてはいづらか予想は出来たが、短時間に自分のことをいかに印象づけ、まとめて述べるかに苦勞したとのこと。同時期に知っているだけで7人が受験し、そのうち彼女を含めて2人が訪日することができた。

試験の内容を聞いて正直驚いた。毎回このような専門的な内容の試験を、しかもかなりの倍率をパスして来日する青年たちの優秀さは想像以上のものがある。この優秀さに更に専門的な興味関心を持って来日するわけだから、プログラムを組む我々は心してかからねばならないとあらためて気の引き締まる思いがした。と同時に、募集選考にあたるNYBの姿勢にも強い共感を覚えた。

## 帰国後

帰国後、ヌイさんは家族やたくさんの友人に日本でのことを報告し、それを聞いた友人も試験を受けてくれた。日本とタイとは文化や宗教的なものが似ているので、訪日しても理解が早かったという。ホストファミリーとはその後ずっと交流が続いているし、セミナー参加青年も10人以上がチェンマイに来てくれ、その後も交流している。日本で、農業や自然を愛する人とたくさん巡り会えたことが一番の幸せだったという。

マンガや雑誌、テレビなどを通じて厚底靴やキャミソール、茶髪など日本のファッションがどんどん入ってくる。流行の取り入れは早い。日本食もブームになっていて、マクドナルドなどのファストフードにとってかわろうとしている。あこがれの国の上位にあるのが日本だ。最後に、もし再び日本に行くことがあったらの問いに、奨学金を得て大学で勉強したいと嬉しそうに語ってくれた。

## ② 武市 昌之「ノックさんのこと」

アフターケアプログラムに参加し初めてタイという国を視察体験することができ

た。今回の訪問で私は1998年「青年招へい事業」の地方プログラムで岡山県に来られたカセサート大学農業学部園芸学科講師の Ms. Phunsup Seubma (ノック) さんの職場をカセサート大学農業学部を訪ねた。彼女は同大学農業学部の園芸学科の講師をしている時に岡山に来られ、授業では生物学、花栽培学をタイの学生に指導しているとのことだった。日本での体験や経験をどの様に現在の職場に役立てているのか、会うのが楽しみだった。

### カセサート大学へ

カセサート大学農業学部はバンコク市内からワゴン車で約3時間あまり走った隣の県にあり、混雑したバンコク市内を離れると水田と椰子の木が点在する農村地帯が延々と続く。道路は私が予想していたよりも良く、片側2~3車線の舗装道路が続いており、大型のトラックが盛んに行き来しているのが印象に残っている。途中で見た水田では、私の家でも中学校の頃まで使っていた懐かしいトラクター(テラータイプで乗用ではない)が水田を耕している風景をいくつも見る事ができた。水路には護岸工事がほとんどなく、私の住む岡山市内浦安の地域でも30年ほど前まではタイの農村風景と変わらない様子だったこともあり、移動の途中で懐かしさを覚えた。

農業学部はそのような農村地域に囲まれた所にある。大学入り口のゲートを入っても結構広い大学のように、農学部へ行くまでにもユーカリの木を試験栽培しているところや試験農園を両サイドに見ることができた。

### スライドを使って

園芸学科の建物の2階で講師のノックさんは待っていてくれた。3年ぶりに合う彼女は元気そうで、彼女の教務室の隣の会議室でお話を伺う事が出来た。彼女は開口一番「青年招へい事業に参加して日本で多くのことを学ぶことができました。」と嬉しそうに語ってくれた。そして、私たちのためにわざわざ授業で使用しているスライドを見せながら、自分が日本で得たものについて次々と紹介してくれた。このスライドは、彼女が日本で撮影したもので、我々が普段何気なく見ている風景の中から植物に関するものを写し取り、それを教育用に編集したものであった。

岡山県の地方プログラムで一番興味を持ったのは、自主研修で参加した笠岡市の干拓地でのバラの栽培だったとのこと。タイでもチェンマイ一帯でバラの栽培が盛んだが、バラ栽培で質の良いものを作るために日本での技術を応用して試験実施しているとのこと。また、チェンマイでは日本の電照菊栽培が近年盛んに行われているとのことであった。マリーゴールドなどの花については、タイでは気候が暖かいのでバイオ等のハイテク技術は行っていないとのこと。

岡山県でその他に印象に残っているのは、マスカット農家を訪問したときのこと  
で、温室での育成に音楽を使ったり、コンピューター制御による送排風ファンなど効  
率よいシステムや良質の農産物を効率よく作る事に感心したとのこと。

また、彼女は鑑賞用植物の研究をしていることから、岡山市内で人工光線による地  
下での植物栽培とか花屋さんに並ぶ熱帯植物などに興味を引かれたとのこと。タイで  
も鑑賞用植物は都市部では市場に出すが、田舎では路上で販売されている。東京での  
大田市場の見学を通じてタイでも鑑賞用植物の将来性は高いと感じ、日本での鑑賞用  
植物需要の様子や将来性をスライド等を通じて学生に説明しているとのことであっ  
た。しかし、タイではまだまだ花の価格が安くこれからの産業だが、日本で学んだ有  
機農法や無農薬農業を学生へ教え、品質の良い苗や化学肥料をなるべく少なくして育  
てる方法を彼らに研究・学習させているところだとのことであった。

### 彼らの視点でプログラムを

今回のアフターケアプログラムで感じたことは、我々受け入れ側の視点とは違っ  
た感じ方や見方を彼らがしていることで、そのことに改めて感心した。1ヶ月の日本  
訪問でのもうひとつの収穫は、タイに住む青年同士がこの日本訪問を機に参加メン  
バー同士の交流が生まれたことである。彼女は同じメンバーの農場へ学生を体験や作  
業に行かせるなど、帰国後もこの事業をきっかけとして互いに交流していることなど  
の話が出された。2時間余りの対話の最後に、この事業への改良点や要望を語ってく  
れた。それによると、すべてのことが勉強になったが、さらによりよい事業にするた  
めには農業技術を直接見たり、生産者と直接話をするプログラムを多くしてほしい点  
や農業関係の工場の視察、最新の農業技術を実施している研究施設や研究現場など  
を見る奥の深い研修や視察を準備してほしいとのことであった。

このアフターケアプログラムを通じての感想は、「青年招へい事業」が岡山の青年  
やホームステイ家庭との交流を始め、同じプログラムに参加したタイ青年同士の友情  
と交流の大きな契機になっていることを改めて強く感じたことである。今回の視察で  
青年たちから指摘を受けた点を改良し、今後も引き続きよりよい「青年招へい事業」  
を実施していきたい。

### ③ 一薫 智「インさんのこと」

私はタイについての知識はほとんどなく、言葉も、「ありがとう」(コープクンカ)と  
「こんにちは」(サワディーカ)くらいしか予備知識もなく訪れた。たくさんの人に会  
い、いろんな所を訪ねたが一番印象に残ったのは、IMPECTで働く Mr. Waiying  
Thongbue (イン) さん訪問であった。



インさんは1999年に青年招へいプログラムで来日し、ちょうどプログラム後半の地方での研修は、私の住む岡山での研修であったため、私は日本人ボランティアとして参加をしており、もちろんインさんのことも良く覚えていた。そんなこともあり、インさんに会った瞬間、本当に懐かしい友人に会ったうれしい気持ちでいっぱいになった。

## IMPECTへ

チェンマイに到着した翌日、私たちは中心から車で40分ほどかけて、インさんの事務所を訪ねた。チェンマイの中心部は観光地ということもあり、西洋人や日本人、韓国人観光客が多く賑わっているが、少し離れただけで殺風景な景色の中に工場が点在し、車の往来も少なくなる。並んで走っている車はミカンのような果物を運んでいる貨物車かミニバスと呼ばれる乗合タクシーが多く、ミニバスとは中型・小型のトラックの荷台に屋根をつけたもので、学校へ通う子供が乗っていたり新鮮な食材を山のように抱えたおばさんが乗っていたりとチェンマイの人々の暮らしの足となっているもので、私にとってはとても珍しく思えるものであった。

インさんは、日本で会ったときよりもとても落ち着いて見え、私たちに自分の仕事の内容やまた日本で学んだことなどを熱く語ってくれた。本当に自分の仕事を誇りに思い、信念を持って取り組んでいる姿勢が強く感じられた。

彼の働くIMPECTというNGOは、タイの山岳民族の生活を援助する団体である。山岳民族はタイに13族あり、その中でもカレン族・アカ族・リス族・ミウ族・モン族・ヤオ族など6つの民族が代表とされている。彼らは、独自の文化を大切に引き継ぎ守っている。たとえばカレン族の子供は白い服を着て、男性は黒い色の服。また未婚女性は白地に赤の刺繍の入った長いドレス。既婚女性はツーピースで黒の刺繍入りの服を着る。象の調教も上手とのこと。リス族は背が高く一般的に美男・美女の民族として知られている。頭にはターバンを巻き女性は虹色の上着を着る。アカ族は精霊信仰が強く、銀貨やボタン、羊毛などで飾ってある円錐形の帽子が特徴でタバコ好きとのこと。実際インさんもカレン族であることを聞かされ驚いた。

こういった山岳民族を訪ねるトレッキング・ツアーもある。タイ北部を歩きながらその周辺に暮らしている山岳民族を訪れ、そのうちのどこかの村で宿泊するというもの。山岳民族の暮らしている場所は車が通れないところが多く、大体のツアーは3～4時間の山歩きが課せられるとのことだが、次にチェンマイへ行くときは是非参加しようと思う。

## 山岳民族の抱える問題

インさんはまた、山岳民族の抱えている多くの問題についても語ってくれた。山岳民族はタイの国に住んでいながら、実際はタイ国籍を持つことのできない集団で、当然与えられべきである教育の権利や選挙権などもない。また、国有地に住んでいるため、政府や民間から出て行けといわれている現状で、土地を買うお金もなく追い出された民族は多々あるとのこと。そういった民族は全てを捨て別の地に移り、生活に困った結果山を焼きケシ栽培に手を出すこともあるという。マフィアなどが目をつけケシ栽培を勧め、できたケシを安い値段で買い取るのである。しかし、全てを失った山岳民族にとってはケシ栽培にたよるしか生活ができないのが現状だ。

一方、ケシは麻薬の原料となり、最近タイでも青少年の麻薬犯罪が後を絶たないそうだ。アンフェタミンやスピードといった薬は本当に気軽にどこでも簡単に手に入るとのこと。インさんは日本で、「山岳民族はケシを作っている悪い民族だ」と言われ、大変ショックを受けたそうだ。実際、タイでもそういった偏見をまだ持っている人はたくさんいるが、山岳民族もケシ栽培をしたくてやっているのではない、実際ケシを育てることは自分たちの体に悪影響をもたらすのだ、とインさんは強調していた。

## インさんの仕事

そんな山岳民族の生活を援助するインさんの仕事はかなりハードなものだ。ときには何日間もかけて古い地図を見ながら山の中を山岳民族に会いに行ったり、人材育成セミナーを実施したり、彼らの使っている薬草の研究をしたり、種や牛を飼う資金を貸したり、子どもに勉強を教えたり、学校を作ったり、山から下りてきた青少年の育成、就学援助、自然環境のまま山を残すプロジェクト、化学肥料を使わない作物の栽培指導など実に多様である。いずれにしても彼らの自主的を尊重して支援・指導しているとのことであった。一つのプロジェクトには大体3～5年ほどかけているそうで、私たちがINPECTを訪れた日も多くの山岳民族がホールに集まり勉強会を行っていた。

INPECTの敷地には3つの白い建物が並び、一つは32人のスタッフが働く事務所で、もう一つは先ほど述べた勉強会や会議に使われるホール、そしてあまり大きくない奥の建物には2階に宿泊室が6つほど。そこへ常時80人の山岳民族の子どもが教育を受けるために共同生活をしていると聞いた。ドアの隙間から見えたおびただしい洗濯物は、本当に私たちの心を大きく揺さぶった。これらの建物や使われている車はユニセフからの資金援助によるもので、そのほか主にヨーロッパや日本からの援助に頼っているとインさんは語ってくれた。

## 自分自身を発見

また、インさんは日本の印象を次のように語ってくれた。日本はバスや電車などの優先(シルバー)シートや盲人の人のための点字や道路表示が多くあり、子どもや老人、障害者にとってもやさしい国だと感じた。また、ホテルやビルなどに非常口の案内が多いことにも驚いたとのこと。また、ホームステイした岡山県の北部にある美甘村では田舎にもかかわらず何台も車があり、都市部にあるのと変わらないほどの大きな体育館があり、また農業を兼業していることにも驚いたようだ。興味を持った点は、電化製品などを大量に輸出する反面、農作物を輸入しているそのギャップの激しさのこと。最後にインさんは規律正しく時間どおりに生活し、車などもきれいにそろえて駐車する日本人の性格、文化は素晴らしいが、果たしてせかせかと生活するのは本当に自分達タイ人にとって対応させるべきことなのだろうか、改めて考える機会を持つことが出来、自分自身を発見する大きな糧となった、良い発達した文化を知りつつ古いものも受け継ぎ、現代人になることが自分にとっても山岳民族にとっても大切なことではないかと語ってくれた。

インさんと別れ、チェンマイのホテルに戻り、ちょうどホテル前はナイトバザールといって出店がたくさん並ぶ中心だった。見物をしていたら、山岳民族の衣装を身にまとった裸足の子どもや老人が道端で銀製のアクセサリーを販売していた。私はそのとき、チェンマイ育ちの人が、山岳民族を真似て商売をしているのだと思っていたのだが、後で聞いてみると、実際に本物の山岳民族だったらしく、何日もかけてチェンマイへ降りてきて、村で作ったものを交代制で売りに来ているとのことであった。この国家、地域社会にも差別はある。しかし山岳民族はそのなかでも立派に前向きに生きていることを改めて感じ、感銘を受けた。

## タイの人たち

バンコクを中心街でもまた経済力の格差を見ることは簡単だった。混み合ったバンコク市内。車はいつも渋滞で、混んでいなければホテルから20分くらいで空港へ着くところ、ラッシュ時には1時間30分程かかる。見渡せば高いビルが立ち並び、スカイトレインは次々と往來を繰り返し、あちらこちらにある大手デパートでは人がごった返している。それだけ聞けばかなり進んだ国のように思えるのではないだろうか。しかし、路上には薄い汚れた服を着て、右手では子どもを抱え左手ではお金を入れてもらうための缶を持つ中年の女性が等間隔に座り、疲れた顔をしている。また片腕のない男性が道路にうつ伏せになったままこっちを見て缶を差し出している。1997年の経済危機以来タイは大きく変化した、そう皆が言っていた。

しかし、そのような中でも今回のアフターケアプログラムで会えた旧知の人、また

今回はじめて会い友達になった人、どのタイの方も本当にやさしく親切な方ばかりであった。急な訪問の知らせにも手際よく対応して下さったJICAの同窓会スタッフの方々には観光案内をしてくれた。また、行く先々で快くこの訪問を受け入れて下さり、職場案内や紹介、また日本での印象を事細かに説明をして下さった同窓生の皆さんにも大変お世話になった。たくさんの思い出をもらい、本当に心から御礼を言いたい。

本当に実りあるアフターケアプログラムであった。国民は国の発展のために熱心であり、また国王も国のため、国民のためにがんばっている。私達が訪ねていった全てタイの人が目標を持ちそれに向かって努力をしている。山岳民族ももちろんそうだ。日本人が失ってしまった熱い心を今も持ち続けているそんな国・タイのこれからの発展を心から願い、私の報告とさせて頂きたい。

#### ④ 千葉 まり子「サクチャイさんのこと」

青年招へい帰国者のサクチャイ氏が経営している蘭の栽培農場は、バンコク市内から車で1時間ほど行ったサムットサーコーン県にある。バンコクに近く、灌漑用水路が整備されていて、高い需要に恵まれていることからこの地域の農業収入が高い。彼は、1997年静岡県沼津市の農家に青年招へい者としてホームステイしたとのこと。

農場内に大きな自宅を建設中で、将来的には日本人たちを受入れ、ホームステイ先として使用したり、農業を見せたりして日本との交流を深めていきたいとのことだった。

#### 順調な蘭栽培

栽培している蘭は、大半が日本への輸出用で、タイでは1本4パーツ(1パーツは約3円)だが、日本では10倍の40パーツで売られているとのことであるから驚きだ。特にクリスマスの時期は、一番需要が多いそうだ。そう言えば、結婚式に新郎がタキシードの胸につけているのも蘭が多い気がする。

蘭は花の部分を出しているそうだ。日本で学んだことは、品質管理が最大であるということ。そして栽培から輸出までに何に気をつけなくてはいけないかということ、①化学肥料の使用量を少なくすること。②害虫駆除の為に化学薬品も少量使用。③有機肥料を多く用いること。④花がきれいであること。⑤輸出先まできれいに咲いたままであるかということ。⑥害虫がついていないこと。⑦枯れたものはいっていないこと。⑧同じ長さで茎がなるべくまっすぐ伸びていること、などである。

蘭の収穫は、温暖な気候に恵まれたタイでは一年中可能であるが、苗つけから収穫までは、4年もかかり、一番花がきれいなのは2年から3年目のものだそうだ。彼は

4つの品種を栽培している。蕪分けで苗を増やしていき、現在は、15ライの広さがあり、1ライにつき3900本の栽培をしている。(参考:1ライ=1600m<sup>2</sup>)

最初は、水田農業で収入を得て資金を蓄え、7年前から蘭栽培を始めた。空港からも近いことから蘭を栽培し輸出するには、いろいろな面で非常に適していたということ。そして、サクチャイ氏は、成功する自信もあったそうだ。ちょうど蘭の海外市場も開けた時期と重なり、基礎知識は一応持っていた彼だが、いろいろな研修等に参加し、技術を身につけることを目的で日本農業の視察をし、蘭栽培に応用した。とりわけ意識改革の面で大きな影響を受けた。その結果、品質管理の重大さに気づいたとのことだった。

苗つけは、土壌にではなく、ヤシの殻を利用している。そのためヤシも作り、実は食物となり、果汁は飲み物となる。その後、きれいに削り貫いたヤシの殻に蘭の苗つけをしていくのである。または、その殻を食器にも利用している。この栽培農場で4人雇用していて、彼は立派な経営者なのである。

この日テーブルの上には今日出荷する1300本の蘭が置かれていて、出荷する業者が引き取りに来るとのことだ。この農場は、輸出農場として登録されており、収入方法は、出荷する業者が市場価格を計算して一ヶ月後に入金してくるとのこと。

#### 酪農組合を作りたい

酪農も手がけている彼は、12年前から乳牛も始めた。最初は牛5頭で、肉牛に力を入れていたが、市場に限界があり、オーストラリア種の乳牛を23世帯が5頭ずつ持つことから始めた。現在は、主が蘭であるため2頭しかいないが、良い乳牛を育てるため、飼料は、無農薬作物をやっている。

彼いわく、日本では酪農組合があって、安定経営や出入荷も指導してくれる為うらやましく思っているそうである。タイにも組合はあるが、システムは全然異なり、日本の組合のような理解はなかなか及ばない。大規模で行う日本システムは、タイでは資金面で無理があり、日本の大規模な農家を見てきたが、参考になる面は多少あったにせよ、規模の違いに愕然とした。彼が日本で見た農家には牛が9頭しかいないのに、機械化していた。なぜ、そんな機械が必要なのかは解らなかったそうだ。だから、小規模でも自然に育てていく方法をとることにした。だが彼は日本より帰国後、友人と日本のようなシステムを将来的には作りたいと話しているそうだ。

このサムット・サーコーン県には組合がないため、となりのナコンパトン県に所属している。現在は乳牛の市場も安定しており、経営には自信があるため、今後も継続していくとのこと。そして、政府も学校の生徒は、毎日牛乳を1本飲むように指導している。

タイの王室も酪農を推進しており、国王は農業関係の技術者でもあるらしく、サクチャイ氏の有機肥料等のやり方に感銘を受け表彰したほどだ。その表彰されている写真がとても誇らしげに壁に飾られていた。

### 自然にやさしい養殖も

午後は、池の中にある小屋にて手料理をもてなされた。それもその池の魚を塩焼きにしたり、土地内にはえている野菜を使っていたり、私たち日本人が忘れていた自然をおもいきり満喫した環境だった。

田んぼだったところをせき止め、池にして、そこで魚の養殖も手がけている。池の中の草は魚の餌となり、牛の糞もえさにしている。かつては鶏も飼っていて、その糞さえも池に流し、魚の餌としていた。収穫は、1年に1回、30トン捕れる。公害を出さない自然を常に心がけるそのやり方は、すばらしいものだった。

スプーンとフォークしか置かれていないテーブルで、魚の身をほぐすことに慣れていない私にサクチャイ氏は、そっと身をほぐし私のお皿に移してくれた。その魚の味は鯛のように淡泊で身がしまっていて、忘れられない味となった。食事中、池の向こうの森では放牧された牛がのんびり草を食べていたのが印象的だった。

彼は、最後に「わたしはこの仕事が好きで誇りに思っている。お金持ちになりたいわけではない。自然をよりよく生かし、生活している。たしかにこの土地はご先祖が残してくれたものだが、継がねばならぬからではない。やり甲斐のある仕事で好きだから農民をしているのである」といった言葉が印象的だった。

この日、同時期に日本でホームステイをしたというラットさんも遅れて農場へ来てくれた。彼は、畜産局のサムサコン支局に勤務しているという。日本滞在中使っていたと思われる名札付きのJICAバックを今もそのまま、大切そうに持ち歩いていた。彼らにとってこの招へい事業は、本当に意味深いものだったのであろう。

タイでは、手と手を顔の中央であわせ「サワディカ」と挨拶することから、会話が始まる。わたしも同じようにしてみた。すると、心が新鮮さに満ちた。作った笑顔ではなく、心の底からでるほほえみ。タイの人はみんな笑顔がすてきだが、こんな習慣があるからなのかもしれない。そして、驚いたことは、どの人にも共通していえることだが、どんな質問をしても明瞭的確な回答をし、自分が何をしなくてはならないか、どう生きていくのかをしっかりとわかっていることである。このサクチャイ氏もなんて立派なのであろう。目でみたこと、感じたことなどを若者に伝えていき育成に力を入れていきたいと語る。彼らは、将来を常に見つめ考えているように思えた。そして、誰もがタイという国土を愛しく思い、農業に力を入れている人が多いことだった。日本では、もうだいたい前に失われた新鮮さとして感じられた。

JICA活動はこれまであまり知らずにいたが、今回の経験でその活動も知りすばらしい事業だということを知った。この活動がもとでアセアン諸国の人々が日本へ来て、よりよい経験となったことを感じた。そして、こうして振り返ると今回の目的とされた友情計画は十分に果せているのではないかと思った。

益々の友好発展を願い、このたびこのような貴重な経験を与えてくださった関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

コップンカー。(タイ語で、ありがとうの意味)

### (3) 提言

#### 問題点

- ① 都内・地方プログラムでの視察訪問先が、彼らのニーズに合っていない。我々がよかれと思って紹介するハイテクの研究施設などは、興味関心を持っていただけるかもしれないが、帰国後にそれほど役に立つとは限らない。
- ② 専門性を活かした上での交流が出来ていない。とりわけ、合宿セミナーなどでは単なる交流ではなく、専門的な意見を交わしながら交流し、将来にわたっての友情を築きたいという希望が強い。それなりの人をリクルートすることが求められる。
- ③ プログラムが重複していることがある。たとえば、学校訪問が続いたり、同じような研究施設を訪ねたりということがままある。もう少しトータル的に調整し、多様なプログラムを体験したいという希望に応える必要がある。
- ④ 机上での説明や映像を使っでの紹介が多く、実感がわかないことがある。技術を直接目の当たりにすることが出来る現場の視察を重視し、質疑応答の時間を十分に確保してほしい。

#### 問題点の原因または理由

- ① 先進国意識から、相手国の現状を無視して、とにかく最先端のものを紹介するということになると思われる。相手国の現状に寄り添い、それを踏まえた上でのプログラム作成が求められる。
- ② 行政、あるいはそれに準ずる施設・研究所などの、この事業に対する関心があまりにも低い。そのような公的な機関がもう少し積極的な関わってくれるならば、民間の企業や施設、研究所などからもさらに大きな支援・協力が得られると期待できる。

- ③ この事業がスタートした当初は、在京の全国組織と各県にあるその支部組織(あるいはその構成組織)とがタイアップしてトータルなプログラムを作成し、一貫して実施していた。それが原則であったと思う。いつの頃からか、この原則がないがしろにされ、都内プログラムを担当する団体と地方プログラムを担当する団体が、相手のことを全く知らないままにプログラムを組むという状況が続いている。両者が十分な協議を重ねればいいのではないかとの考えもあるが、現実的にはそれにも限界があるためにこのような状況を招いているのではあるまいか。
- ④ プログラムを組むにあたって、現場の作業日程を調整することが難しいことがままある。とりわけ農業などの現場となると季節や天気、時間帯にも左右されることが多く、逆に机上での説明や映像紹介だとそれがないためこのような傾向が現れるのではなかろうか。

#### 改善のための具体的方策

- ① 来日青年のニーズを一日も早くつかむということにつけるのだが、現実には不可能に近いと思われる。ならば、JICAの現地事務所を通じて、あるいは現地の派遣窓口、タイならばNYBを通じて現地の当該分野における状況を早めに理解するという方法が取られると思う。さらに、派遣国側の要望についても、早めに知らせていただきたい。ただし、その場合はJICAの現地事務所と十分協議した上で現状に即した要望としていただきたい。  
また、アプリケーションフォームとプログラムの早期交換が求められるのも当然のことである。
- ② JICAの関係省庁に対する一層のご努力と我々のフットワークの軽さが求められる。
- ③ いわゆる中央団体と地方団体との関係を、この事業を始めた当初の原則に戻すことが第一に求められる。それが不可能なところについては、JICAの地方センターが地方団体を推薦していることもあり、その地方センターが間に入って調整することも考えられるのではないか。
- ④ 現場重視という原則を作るが必要ではなかろうか。プログラムの作成にあたってはその原則に基づいて、現場で実際にその技術を使用している方との交流を充実することが求められる。



JICA